
ラ = トスカ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライトスカ

【Nコード】

N2856F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

一八〇〇年ローマ。古い歴史を誇るこの街に一人の歌姫がいた。その名はフローリア・トスカ。彼女は恋人カヴァラドゥッシの為に何をなしたか。プッチーニのオペラを小説にしたものです。舞台はサルドウの原作によっています。

こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.paintwest.net/>

序曲

ラ・トスカ

序曲

ナポレオンⅡボナパルトという男がいた。コルシアに生まれフランス陸軍士官学校を出た後軍人となった。門閥の出ではなく風貌も冴えない小男であり士官学校での席次も大して良くはなかった。世が平穏な時ならばおそらくごく普通の砲兵将校として歴史に名を残すことなく人生を終えていたであろう。だが時代が彼を激動の舞台へと誘った。

寒波によりセーヌ川が凍りパリに食料を運ぶことが困難となった。これが引き金となり革命が起こった。

革命は思いもよらぬ方向へ進んでいった。ラファイエットやミラボーといった穏健的王党派が表舞台から去り王政が倒れると穏健的共和派であるジロンド派、そして急進的共和派ジャコバン派が目まぐるしく政権の座についた。

その中でナポレオンは頭角を現わしていった。武勲を挙げ若くして閣下と呼ばれる身となり政府の領袖達にもその名と軍事的才能を知られるようになった。やがてフランス国民の大部分を占める農民の支持を得た彼は所謂『ブリュームルのクーデター』を起こし執政政治を開き自ら第一執政となった。フランスは彼のものとなった。

次に彼が狙ったのは長靴であった。豊かであり政治的に分裂した状況にあったイタリアに攻め込むのは二回目であった。それだけに北イタリアを勢力圏に収めているオーストリア、そして南部を支配するナポリ王国は脅威を覚えた。彼等はそれまでもナポレオンの軍事的才能の前に敗北を続けておりその配下にある兵達の横暴の凄まじさも身を以って知らされていた。

それに対し先頭に立ってフランス軍と対峙したのがナポリ王妃マリアⅡカロリーネであった。オーストリアの偉大な女帝マリアⅡテ

レジアの皇女である彼女は愛する妹マリー・アントワネットがフランス革命政府によってギロチン台で処刑されたことを決して忘れてはいなかった。迫り来るであろうフランス軍に対し激しい敵意を、そして母国オーストリアやイギリスの強力な支援を背景とした戦力でもって迎え撃たんとしていた。

イタリア中がフランス軍に恐れおののく中で啓蒙主義や無神論に影響を受けフランスの革命思想に傾倒する者達もいた。ナポレオンは彼等を利用し表向きは友人としてだが実際は傀儡として彼等を駒として使っていた。

カロリーネにとってこの様な革命政府の同調者は獅子身中の虫であつた。彼等を厳しく取り締まり次々と処刑していった。その激しさは彼女がナポレオンに対して向ける憎悪と比しても全く遜色の無いものであつた。フランス軍とカロリーネによりイタリア全土が赤黒く生臭い血の帳に覆われたかの様であつた。

それはロムルスとレムスによって建てられ歴史と神に愛された古の都ローマでも同じであつた。否神の代理人が座すこの都の重要性は誰もが知るところでありフランスとナポリのこの都をめぐる対立は一際激しかった。カトリックの腐敗と墮落に反発する意もあつたのである。ローマは革命派の中でもとりわけ過激な者達が多くカロリーネも目を光らせていた。ローマに秘密警察を置きその総監にシチリアの山賊を祖に持つヴィッテリオ・スカルピア男爵を任命した。

辣腕で知られるこの男をローマに置き吹雪のアルプスを越え美の都ミラノを陥れ南下するフランス軍を北イタリアアレクサンドル近辺のマレンゴ平野において迎え撃つことにより万全の備えを敷いたカロリーネは勝利を確信それを祝う為ローマへ向かった。一八〇〇年六月十七日、ローマの長い歴史においても特に有名な舞台劇が幕を開かんとしていた。

第一幕その一

第一幕 聖タンドレア・デッラ・ヴァッレ教会

ローマには多くの教会がある。その一つとして聖タンドレア・デッラ・ヴァッレ教会がある。俗にデッラ・ヴァッレ教会と呼ばれるこの教会はローマの教会の中でも特に有名なものの一つである。内部は高窓から差し込む黄金色の光で眩く照らされカルロ・マデルナの建てた巨大なドームがそれを覆っている。カルロ・ライナルディの造ったバロック様式のファザード、ランフランコ兄弟の楽園と聖アンドレアを描いたフラスコ画等多くの芸術作品で飾られている。その中にはまだ作成途中の絵画もある。そして礼拝堂も。

長い歴史を誇る教会なだけありローマの高名な貴族達の家それぞれの礼拝堂がある。どれもその権勢を誇示するかの様に豪華な装飾が為されているがその一つにアンジェロツティ家のものがある。

ローマ、いやイタリアでアンジェロツティ家をしらぬ者はいない。ローマで代々重要な役を担ってきた侯爵家でありハプスブルグ家やブルボン家とも繋がりがある。古い家の多いローマでも五本の指に入る名門でありその権勢と富はイタリアに知れ渡っている。同時に代々進歩的な人物を輩出していることでも有名でありことに当代の主チエーザレはフランス、それもジャコバン派の熱狂的な支持者であった。

当初彼はさして急進的でもなくどちらかと言えばオーストリア寄りの保守的な人物であった。オーストリアの外交官としてナポリやローマに赴任したことがある。この時フランスは革命の業火の中にあった。

フランスの情勢を把握する為にアンジェロツティは派遣されたわけであるが彼はこの時のフランスを調べるうちに革命派に惹かれて

いった。

そこでナポレオンという若者に出会ったのは彼にとって幸だったのか禍だったのか。幾度となくナポレオンと語り合ううちに彼はナポレオンの虜となってしまった。

常にナポレオンの側にいるようになった彼をオーストリアは嫌うようになった。外交官を罷免され宮中への出入りも禁じられた。だが彼はそれを全く意に介さなかった。ナポレオンの第一次イタリア遠征に従軍しフランス軍がローマに入城しローマ共和国という傀儡国家を建てるとその領事となった。領事とはいえナポレオンの操り人形である事は誰の目からも明白であつたがこの時彼の心は絶頂の中にあつた。しかし運命の女神達は時として人に残酷な運命を与えるものである。アンジェロツティは神を信じてはいなかった。ましてや遠い北の人々に忘れ去られた神々なぞ知りもしなかったかもしれない。だが運命の女神達は実に皮肉屋であつた。信じられない程奇妙な時の糸で彼を捕らえた。

領事として各国の大使や外交官達を招いたパーティの会場でナポリより招かれたイギリス公使ハミルトン伯とその若い妻に会つた時彼の顔は思わず凍りついた。

ハミルトン伯の若い妻、エマハミルトンと名乗る美しい女性、それはアンジェロツティがロンドンにオーストリアの外交官として派遣されていた頃よく通つていた高級娼館の娼婦だったのだ。

貧しい鍛冶屋の家に生まれた彼女は美貌に恵まれていた。当時日々の糧に困る女が就く仕事といえは真つ先に挙げられるものが娼婦であつた。エマハミルトンも例外ではなかった。だが美貌だけでなく頭も良かった彼女は裕福な貴族達を次々と籠絡し、遂にハミルトン伯の後妻となつたのである。

夫がナポリ公使に任命されるとその美貌と知性によりナポリ社交界、そして王妃マリアカロリーネに気に入られ絶大な信頼と影響力を手に入れた。その二つは夫のそれを凌ぐ程であつた。特に外交手腕は見事でありロイヤルネービーがナイルの海戦でフランス軍

に対し勝利を収めたのも彼女の尽力でシチリアの制海権を得たことによるのが大きかった。

その様に大きな力を持つ彼女が一つ恐れる事があった。それは娼婦として生きていたという自らの忌まわしい過去が暴かれる事であった。母国イギリスではナポリ公使を務める有力者の妻ということもありそれを完全に消してしまう事が出来た。ナポリではそのような事知るよしも無い。だが目の前に彼女の過去を、しかもそれを直接的に知る者がいたのである。

彼女は怖れた。自らの過去が暴かれ事は彼女にとって今の栄華が崩れ去ることに他ならなかった。彼女にとってアンジェロツティという男は災厄そのものであった。

第一幕その二

刺客を送ろうと考えた。だが彼の周りは常にフランス軍の兵士達
が固めており暗殺は不可能であった。アンジェロツティの方も自身
の命が狙われている事は察知していた。その為身の周りを常に用心
していた。エマとアンジェロツティの命を賭けた駆け引きは暫く続
いた。だがそれも終わる時が来た。欧州の情勢の変化に伴いフラン
スのイタリア半島における影響力が後退した。それによりフランス
の傀儡国家であったローマ共和国も崩壊してしまったのである。

その機を逃すエマではなかった。アンジェロツティの屋敷へすぐ
さま刺客を送ったがそこに獲物はいなかった。だがエマは諦めなか
った。王妃に頼みアンジェロツティの手配状をイタリア全土に配布
した。彼の首には大金が掛けられ他の共和主義者達と共に追っ手を
差し向けられた。

だがイタリアに大きな影響力を持ち用心深い彼の行方はようとし
て知れなかった。情報は次々と入ってくるがそのどれもが風聞であ
りその尻尾は掴めなかった。

そうこうしているうちにナポレオン率いるフランス軍が再びフラ
ンスへ攻め入って来るとの話が来た。エマが焦った。このままでは
アンジェロツティに逃げられてしまふ、彼女は次第にその焦りの色
を濃くしていった。

やはりナポレオンは来た。瞬く間に北部を席卷しローマへ向けて
南下して来る。これにより共和主義者達が活気付くのを怖れた王妃
は大軍を北へ向かわせると共に自らの腹心スカルピア男爵を対共和
主義者の為の秘密警察總監としてローマへ送り込んだ。

スカルピアは着任早々共和主義者達を次々に捕らえていった。そ
して片っ端から絞首台へ送り込んだ。ここで捕らえられた共和主義
者の中にアンジェロツティもいたのである。彼は自らの本拠地ロー
マに潜んでいたのだ。

エマは狂喜した。すぐに死刑にしてしまふよう王妃に進言した。大きな影響力を持ち王妃の実家ハプスブルグ家とも関係があるアンジェロツティ家の当主だけにその処刑には難色を示したが家督を教皇領の重職にある彼の弟に継がせる事、そして獄死という形で始末してしまふ事で王妃を説得した。そしてその旨をローマのスカルピアに届けた。これでエマはようやく安堵した。その心は過去を知る男への憎悪からエジプトでフランス海軍を破った片目片腕の提督への愛へとなつていった。

アンジェロツティが暗殺されるという話は王妃とエマ、そしてスカルピアだけが知っている筈だった。だがエマが彼に多額の賞金をかけていた事とスカルピアが捕らえた共和主義者達を略式の、既に判決が決められている裁判の後処刑台に送っている事からアンジェロツティの命が風前の灯にある事は容易に察せられた。アンジェロツティ家としては何としても主を救い出さなければならなかった。

まず教皇に仕えている彼の弟シモンが動いた。兄が投獄されているサン・タンジェロ城の典獄を買収した。トレベリというこの典獄は袖の下に弱く信用の置きぬ人物であつたが牢獄の鍵を持っている事から彼を取り込むしか他に無かつたのである。

次はアッタヴァンティ侯爵家に嫁いでいる妹マルケサの番だった。兄が脱獄したならすぐにアンジェロツティ家の礼拝堂が有る聖タンドレア・デッラ・ヴァッレ教会に行くよう伝えそこで変装してローマを脱出するよう手配した。無論礼拝堂の中には変装する為の服や小道具を隠しておいた。

二人の手となり足となりアンジェロツティ家の者達は動いた。スカルピアの目を盗みながら主を救出する計画は進められた。

六月十七日、計画は実行に移された。アンジェロツティはサン・タンジェロ城を逃げ出し教会へ向かつた。

ドームの中はフラスコ画や豪華な装飾で飾られている。高窓から差し込む光が翳るうとしている。夕暮れが近付いている。光に照らされている絵画の中にはまだ完成していないものもあり布で覆われ

ている。その下びは絵具や筆等が置かれている。そのすぐ隣に入口がある。木製の大きな扉だ。その扉が少し開いた。外から囚人服を身に纏った男が入って来た。

金色の髪に青い瞳をしている。背は普通位か。汚れてはいるが気品のある整った顔をしている。囚人服はボロボロで所々破れている。肩で息をし何やら震えている。何処からか逃亡してきたようだ。

左右を見回しながら礼拝堂の方へ向かう。礼拝堂の前へ行くと懷から何やら取り出した。

それは鍵だった。鍵で礼拝堂の扉を開けると中へ入っていった。扉が閉められた。中からガチャリと音がした。

暫くして入口から二人の男が入って来た。一人は白髭を生やした小柄な老人でもう一人は手に籠を下げた若い男である。

第一幕その三

籠はパン籠であつた。中には少量のパンとコールド「チキン」、無花果数個にナプキン、二つの銀の杯、そしてワインのデキャンタが入っている。

老人はデキャンタを見て言った。

「ゼツナリーノ君、そのワインはグラグナノではないかい？」

その言葉にゼツナリーノは苦笑した。

「何言つてんですか堂守さん、これは白ワインでしょ、グラグナノは赤ワインじゃないですか」

「はて、そうだったかの？じゃあマルサラか」

「そうですよ。閣下のお気に入りなんです」

「鶏に白ねえ……。閣下も少し変わつておられる。まあ変わつておられるからフランスなんぞ支持なさるんだろっ」

「ちよつと」

堂守を咎める。強い口調だ。

「あ、済まぬ済まぬ」

両手の平でゼツナリーノを制しながら謝る。

「何も御前さんの御主人に悪気がある訳ではない。優しい方だし礼儀正しい。何より気前が良い。子爵殿には感謝しておるよ」

「なら良いんですけどね。閣下の事を悪く言つと承知しませんよ」

「判つた判つた」

そう言い終わると堂守は教会の清掃を始めゼツナリーノは入口の側にある布で覆われた絵の下に置かれている絵具や筆の手入れにかかった。少しして一人の男が入ってきた。

「マリオはいるかい？」

背の高い黒い髪と瞳を持つギリシア彫刻の如き端正な顔立ちの男である。逞しい身体をオーストリア軍将官の軍服とマントで覆っている。

「あ、伯爵」

堂守とゼツナリーノは思わず直立不動となった。彼こそローマの有力貴族の一つカヴァラドゥッシ伯爵家の当主でありまたオーストリア軍きつての知将と謳われるアルトゥーロ「カヴァラドゥッシ」である。

かつてオーストリアのフランス大使を務めた父と哲学者エルヴァシウスの姪孫娘との間に生まれ長じてオーストリア軍士官学校に入り軍人として武勲を挙げてきた。謹厳実直で度量も広く兵士からも人気が高いオーストリア軍の名将カール大公の懐刀でもある。この度のイタリア戦役においてもその知略でもってフランス軍を大いに悩ませた。特にゼノア城に籠城するフランス軍を打ち破り多数の捕虜を得たのは彼の策に拠るところが大きい。この功によりナポリ王妃より勲章を賜る為ローマに来ていた。

「いないのか？確かこの教会で絵を描かせてもらっていると聞いたのだが」

「ユダヤ人街へ画布を買いに行かれたのではないのでしょうか？画布が少なくなってきたと言っておられましたので」

「ユダヤ人街か。ならばすぐに戻って来るな」

「はい」

ゼツナリーノが答えるとすぐに扉が開いた。

「ゼツナリーノ、誰か来てるのかい？」

前後に短く切った黒い髪を持ち顎鬚を生やした男が入って来た。

黒い瞳をしている。その光は強く明るい。細面の美男子である。どうも髭が似合っていない。青い丈の長い上着に白いシャツ、赤のタイを身に着けている。黒の長ズボンにブーツをはいている。背は高い方か。彼こそアルトゥーロ「カヴァラドゥッシ」の弟、マリオ「カヴァラドゥッシ」その人である。

二人の父はフランス大使をしていた折ディドロやダランベールといった百科全書派の学者達と交流があった。エルヴァシウスの姪孫娘と結婚したのもその縁からであった。

兄は軍人を志したが弟は父の影響か学者を志した。フランスへ留学しパリで哲学を学んでいたが絵に興味を持ち始め当時その絵が大いに話題となっていたダヴィットの元へ弟子入りした。才能があったのかその技量はすぐに師を唸らせるまでになった。独立しすぐに名が売れ始めたがその矢先に両親が急死したとの報が入ってきた。遺書が残されていたがその為兄と遺産相続を相談する為ローマに帰ったがある個人的な事情の為相続の件について話が着いてもローマに留まり絵を書き続けている。

「マリオ」

声の主を見た。そこには彼が良く知る人がいた。

「兄さん、どうして此処に！？ファルネーゼ宮にいたんじゃ・・・」

「

「少し御前と話がしたくてな。二人で話したいのだが」

「うん」

マリオは頷くと堂守とゼツナリーノを呼び二人にチップを渡した。

「これで何か美味しいお菓子でも食べに行ってくれ」

二人は喜び一礼した後すぐに教会を後にした。二人が出て行ったのを見届けるとマリオは兄に向き直った。

「何の話かは解かってるよ。スカルピアの事だろう？」

弟の問いに兄は黙って頷いた。

第一幕その四

「そうだ、奴が御前を狙っている」

一呼吸置き続ける。

「フランス軍がイタリアへ侵攻してきて以来カローネ陛下は共和主義者への締め付けを厳しくしておられる。あの男をこのローマへ送り込まれたのもその一環だ」

「だからといってあの様な男を」

スカルピアの評判は悪かった。残忍で狡猾と称され袖の下や色欲に目が無いと噂されていた。その屋敷には自身の故郷から連れてきた品性の卑しい者達が絶えず出入りしていた。ローマの貴族や市民達は彼を嫌悪の目で見ていた。

マリオも例外ではなかった。否名家の出身であり芸術とローマを愛する彼にとつてスカルピアは最も嫌悪する種の人間であつた。これは彼の主義、信念も入っていたがそれ以前に彼はスカルピアを生理的に嫌悪していたのだ。

「マリオ、すぐにローマを去るんだ。さもなければ次に絞首台へ登るのは御前だ」

「そうさせてもらつよ、兄さん。ただもう少し待ってくれないか」

「何故だ？」

兄の問いにマリオは顔を下に向けはにかんで答えた。

「今は離れたくないんだ。ここで描いている絵の事もあるし」

絵の方へ顔を向けて言った。

「それに・・・フローリアのローマでの舞台がまだ残っているんだ」

「フローリア？今ローマで話題になっているというソプラノのフロリアットスカのことか？」

「やっぱり知っているみたいだね」

「少しだけだな」

武人である彼は芸術に疎いところがある。

「素晴らしい美声と技術、そして艶やかな美貌の持ち主だという話だな。私はまだ会ってはいないが」

「実はね……」

マリオがまたはにかんだ。

「今彼女と付き合ってるんだ」

「何ッ!？」

思わず声をあげた。

「一年前アルジェンティーナ座で仕事をしている時に会ってね。

お互い一目惚れだったんだ。それ以来続いているんだ」

「おい初耳だぞ。何で知らせてくれなかったんだ」

「御免御免、知らせるつもりだったんだけどね。忙しくてつい」

「全く……。で彼女の舞台は何時終わるんだ？」

「三日後だよ。その頃にはこの絵も完成するし彼女の次の契約地ヴェネツィアへ一緒に行くつもりなんだ。その準備は済ませてあるよ」

「ヴェネツィア……。あの執政殿のお気に入り水の都か」

「うん。彼の庇護を得られるしね」

その言葉にアルトゥーロは表情を険しくした。

「マリオ、御前の主義についてとやかく言うつもりは無い。だがな、ボナパルトには注意しろ。あの男は自らの栄光ばかり追い求めその為には他の者の命なぞ塵芥程の価値も無いと考えている男だ。彼がエジプトで兵士達を見棄て、このイタリアでローマ共和国を切り捨てた事を知っているだろう」

「……」

マリオは反論しなかった。彼はナポレオンの信奉者だった。共和主義こそが正義だと信じていた。兄に反論しようと思えば出来た。だがそれをあえてしなかったのは兄が指摘した事を彼はよく知っておりそれに対し彼も思うところがあったからである。

「最近あの男はとかく専制的になってきている。王以上にな。まるで皇帝の様に振る舞いだしたという。だがそれを見極め結論を出すのは御前だ。よく考えて決めろよ」

「うん・・・」

今度は頷いた。

「では私はこれで失礼する。これからファルネーゼ宮に戻り陛下と御会いしなければならぬからな」

「うん。じゃあ兄さんも元気で」

「うむ。今度二人で飲もう。トカイのいいのがある」

「トカイか。楽しみにしてるよ」

挨拶を交わすとアルトゥーロ「カヴァラドゥッシは教会を後にした。兄を見送るとマリオ「カヴァラドゥッシは教会の扉に鍵をかけた。絵に掛けてある布を引き降ろし仕事に取り掛かった。

暫く描いていたが絵具が切れた。絵具を取る時そのすぐ側に置かれていた籠が目に入った。

「ゼツナリーノの奴またこんなに持つて来て」

籠を右手に取り中身を見て苦笑した。

「昼食ならともかくおやつには多過ぎるだろうに。まあ後でゆっくり食べるとするか」

籠を元の場所に戻した時礼拝堂の方からガチャリと音がした。

「！？」

咄嗟に柱の陰へ隠れた。顔をソツと出して覗き見るとアンジェロッティ家の礼拝堂の扉が開き中から人が出て来た。

「あれは・・・」

礼拝堂から出て来た人物をカヴァラドゥッシは良く知っていた。幼い頃からの友人であり思想的、政治的にも同志であるからだ。

「アンジェロッティ、君か！」

思わず柱の陰から身を現わした。アンジェロッティは柱から人が急に現われたのを見て思わず肝を冷やしたがそれが自分の知っている人物と解かりアンジェロッティも思わず声をあげた。

「カヴァラドゥッシ、君か！」

二人は駆け寄り抱擁し合った。二人の顔に喜びの色が現われた。「良かった、スカルピアに捕われたと聞いて心配していたんだ」

「サン＝タンジェロ城に今まで入れられてたけれどね。もう少しで暗殺されるところだったんだ。それを弟と妹が救い出してくれたんだ」

「そうか、それは良かった……で、これからどうするつもりだい!?」

「それなんだが……」

その時教会の外から女の声がした。

「!?」

その声は高くはりがありそれでいて澄んだ美しい声だった。その声の主をカヴァラドゥッシは非常に良く知っていた。

「マリオ、マリオ」

自分の名を呼ぶその声の主が誰か彼は知っている。アンジェロッティの方へ顔を向け右目を瞑って言った。

「レディだよ。僕が良く知っている人でね。善良で信心深いがとても焼き餅屋のね。悪いけれど少し隠れてくれ」

カヴァラドゥッシの言葉にアンジェロッティは頷き礼拝堂の中に入って行こうとした。その時籠が目に入った。

第一幕その五

「ああ、これかい？」

カヴァラドゥッシの方もそれに気が付いた。

「うちの使用人がおやつに持って来てくれたんだけどね。生憎お腹は減っていないんだ。逃げて来て疲れているだろう、良かったら食べよ。中身は割りと豪勢だよ」

「いいのかい？」

その言葉にアンジェロツティは喉を鳴らした。

「ああ。是非食べてくれ」

「有り難う」

礼を言つと籠を手に取りアンジェロツティは礼拝堂に入つていった。一方教会の扉の入口からはカヴァラドゥッシを呼ぶ声と扉を叩く音が喧しい程聞こえて来る。

「待ってくれ、今開けるよ」

苦笑しつつ扉を開ける。

慌しく一人の女性が入つて来た。茶の波がかった長い髪と琥珀色の瞳を持つ艶やかな女性である。肌は雪の様に白く赤のドレスと良く合っている。その唇は紅であり右手には花束がある。やや高めの身体は非常に均整がとれその美しさは芸術の女神ミューズを思わせる。この女性こそ当代一と称せられる歌姫でありマリオ「カヴァラドゥッシ」の恋人であるフローリア「トス力」その人である。

トス力は北イタリアヴェローナ近辺の貧しい羊飼いの娘として生を受けた。彼女が幼い頃に両親は流行り病で死んだ。他に兄弟も親戚も無い彼女はヴェローナにあるベネディクト派の修道院に引き取られた。ここで彼女は教育を受け聖書と信仰、そして賛美歌をしつた。

彼女が十歳になった頃であろうか。修道院のオルガン奏者が彼女の美しい声に気付いた。それから特別に歌の訓練を始めたがそれに

より彼女は声だけでなく歌い手としての才能も素晴らしいものだと
うことが解かった。やがて修道院の誰もが彼女は歌手に相応しいと
思うようになった。

その歌はやがてヴェローナ市民の知るところとなり祭日になると
トスカの歌と声を聴きに市民達が大勢で賛美歌が歌われる教会に来
るようになった。その中には高名な音楽家も含まれていた。とりわ
け作曲家チマローザは彼女の美声と歌、そして艶やかさに魅せられ
てしまった。完全にトスカの虜となってしまったチマローザは彼女
に自分の作品を歌って欲しいと考えるようになった。そしてこの修
道女をオペラ歌手にしようと修道院に掛け合ったがこの美しいが善
良で人を疑う事をしない娘を心配した修道院の僧達は彼女が神に
仕える身である事を楯に取り譲らない。だが諦めるといふ事を知ら
ないチマローザは修道院を脅したり宥めたり、拳句には騒ぎの好き
なヴェローナの市民達を巻き込んだりしたので遂には市議会まで動
きヴェローナを二分する大騒動にまで発展してしまった。

この騒動はすぐにあちこちに知れ渡りローマ法皇ピウス六世の耳
にも入るようになった。話を調停する為法皇はトスカの歌声を聴く
ことにした。そしてサン・ピエトロ寺院の法皇の間にてトスカは自
らの歌を法皇に披露する事となった。

法皇は彼女の歌に聞き惚れた。歌が終わると彼女にこう言った。
「貴女の歌声は私の心を和ませたのと同じ様に多くの神の子達に優
しい涙を流させる事になりました。そしてそれは神への愛と祈り
に通じる道でもあるのです」

その言葉にトスカは感涙した。そして法皇に跪いた。法皇は彼女
を立たせ言った。

「さあお行きなさい。そして貴女の歌で神の慈愛と信仰を世に広げ
るのです」

こうしてトスカは還俗し歌手となった。チマローザの下で育てら
れ短く切り揃えられた髪も長くなりその歌と美貌は日増しに輝かし
いものとなっていった。

彼女のデビューはパイジエツロの『ニーナ』、タイトルロールであった。幾十とカーテンコールに呼ばれる程の盛況でその話を聞いたスカラ座やフェニーチェ歌劇場にも呼ばれるようになり瞬く間にイタリアを代表するソプラノとなった。その技術は素晴らしくどのような難解な歌も歌いこなした。美しい舞台姿も評判となり役柄も多かった。

ローマでも歌った。とりわけ法皇の御前で歌う事が多かったが歌劇場でも歌った。アルジエンティーナ座で師でもあるチマローザの『秘密の結婚』に出ていた時そこで絵を描いていたマリオ「カヴァラドゥッシと会い今に至る。

「何故鍵を掛けていたの!？」

教会の中を疑わしげに見回す。

「教会の番人がそうしてくれって言ったんでね」

「そう。で、誰とお話してたの!？」

疑わしげな目でカヴァラドゥッシを見上げる。

「誰とも話なんかしていないよ」

「嘘、話し声がしたわ。他の女の人と一緒だったのでしょ!？」

「違うよ、信じてくれないのかい？」

「信じないわ。貴方みたいな人誰が放っておくというのよ」

「ちよつとフローリア」

むくれるトス力を宥めようとする。

「そんなに僕はもてないよ。君は一体何でそんなにふくれるんだい？焼きたてのパンじゃあるまいし」

「えっ、それは・・・」

今度は顔を赤らめた。視線を恋人から外した。

「もてないけれど君一人にもてたらそれでいいさ」

そう言つてトス力を抱き寄せる。

「駄目よ、いけないわマリオ。聖母様の前でそんな事」

両手の平で恋人の胸を押し止める。

第一幕その六

「後でね、あの別邸に行つてから」

「別邸？僕の家に来ればいいのに」

「私はあの別邸が好きなの。銀の星々が散りばめられた紫の空の下で赤や黄の花々、青い泉、そして緑の草達が芳しい香りで私達を誘っているのよ。愛の女神の泉みたいに。私には自分でも抑えられない激しい気が狂いそうになる程の血が流れているの。貴方の為に。その血がああ邸を欲しているのよ」

「解つたよ。じゃあ今日の仕事が終わつたら夕食を食べる時に待ち合わせよう」

「御免なさい、それは出来ないわ」

「何で？今日は休みなんじゃ」

「急にファルネーゼ宮で歌う事になったの。短いカンタータだけけれど」

「成程」

何故彼女が急に歌う事になったかカヴァラドゥッシはすぐに理解した。だが顔には出さなかった。

「朝になったらヴェネツィアへ発つ準備をしましょう。あの街には何回かお仕事で行つた事があるけれどとても素敵な街よ。今から楽しみだわ」

「そうだね、じゃあ僕も早く仕事を終わらせるか」

「そうしましょう」

こう言つて絵に花束を捧げた。ふと絵を見上げた。

「この絵ね。貴方が今描いているのは。・・・マグダラのマリア？」

「そうだよ。気に入ってもらえたかい？」

「いいえ」

「どうしてだい？僕はよく出来ていると思つただけど」

「金髪に青い瞳なんですもの。茶の髪と黒い瞳じゃなければ嫌よ」

「おいおいフローリア、それって君のことじゃないか」
思わず苦笑する。

「悪い!？」

「いいや、君らしいなと思って」

「けれど確かによく出来ているわね。誰かに似てるけど」

「ああ、マルケサをモデルにしたんだ」

「マルケサ？アッタヴァンティ侯爵夫人の事!？」

「そうだよ。彼女とは幼馴染だしよく知っているしね」

「マリオ、貴方ひょっとして……」

疑惑の目を恋人に向ける。

「ちよっと待ってくれよ、何でそうなるんだよ。彼女は単なる幼馴染だよ」

「どうかしら。美人だしその上情友がいらっしやる方ですし」

「あのねえ、フローリア」

ふとカヴァラドゥツシの顎鬚が目に入った。

「まあいいわ。今日は信じてあげる」

「良かった」

「このお髭に免じてね」

両手でカヴァラドゥツシの顎をさすった。

「私が貴方を好きになった理由を思いたしたの。このお髭が私の目に入ったから。沢山の人が似合わないって言うし司教様なんか早く剃られなさいつて仰るわ。けれど私は嫌。貴方のこのお髭がなくなったら生きていられないわ」

「フローリア……」

再びトスカを抱き寄せようとする。トスカはそれをまた宥めた。

「マリア様の御前だから駄目って言うてるじゃない。それは後で」
「解かったよ」

多少渋がりながらもそれに従う。

「じゃあそろそろ宮殿へ行つて来るわ。パイジエツク先生と打ち合わせをしなくちゃいけないから」

「それが終わったら別邸においで。夕食とワインを用意して待つてよ」

「楽しみにしてるわ」

立ち去ろうとする。扉を開けた時に振り返った。

「マリア様の瞳は黒にしてね」

「うん、じゃあそうしとくよ」

「絶対よ」

扉を閉め教会を後にした。中にはカヴァラドゥッシだけが残された。

「そうか敗れたか。ならば急いだ方がいいな」

そう呟き礼拝堂の方を見た。アンジェロツティが出て来ていた。

「さっきの話の続きだけれどこれからどうするつもりだい？」

「ローマを脱出するつもりなんだ。僕を逃がしてくれた城の典獄の手引きでね。女に化けて」

「服は？」

「弟と妹が礼拝堂の中に隠しておいてくれた」

礼拝堂の中を指差した。

「そうか、そしてその典獄は何時ここへ来るんだい？」

「明日の朝だ」

「じゃあその服は着ておいた方がいいよ」

「どうしてだい？」

「夜になるとこの教会は冷え込むからね。用心にこした事はない」

「そうか。じゃあ早速着るとしよう」

礼拝堂へ入り衣装を取り出してきた。白っぽいドレスとヴェール、そして扇である。

アンジェロツティは服を着込み始めた。ヴェールを被ろうとしたその時遠くの方から砲声が聞こえて来た。二人は愕然となり顔を見合わせた。

「城の方からだ」

アンジェロツティの顔が蒼白になった。

第一幕その七

「どうやら典獄が君を逃がした事がばれたらしいな。スカルピアの刺客達が街に放たれるぞ」

「どうしよう」

「僕に任せてくれ。いいか、よく聞いてくれ」

カヴァラドゥッシは話を始めた。

「この教会出ると囲いの少ない菜園がある。その向こうに藤の茂みがあるがそこは野原を通って僕の家まで続いている。僕の家には馬車がある。それで別邸に行こう」

「別邸に!？」

「そうだ。あそこなら大丈夫だ」

「じゃあすぐに」

「待つてくれ、用心にこした事はない。僕も一緒に行こう」

「それじゃあ……」

二人が出ようとしたその時扉の向こうからカヴァラドゥッシを呼ぶ声がした。

「スカルピアの!？」

アンジェロツティの顔が凍りつく。

「いや、違う」

カヴァラドゥッシがその恐怖を打ち消した。

「ここの堂守と僕の侍従だ。それにもうすぐ枢機卿と聖歌隊が来る。それに紛れて教会を出てくれ。すぐに僕も行く」

「解かった。じゃあ暫く隠れているよ」

「ああ」

急いで礼拝堂へ消えた。その時扇を落とした。だが二人はそれに気が付かなかった。礼拝堂の扉が閉められると同時に堂守とゼツネリーノが駆け込んで来た。

「騒々しいな、何事だい?」

あえて落ち着き払ってみせる。

「何って、聞こえなかったんですかあの大炮の音が!!」

「ああ、さっきのあれだね」

外から子供達の声がしてきた。そちらの方へ気をやるふりをしてアンジェロツティ家の礼拝堂へ目をやる。

(もう少しだ)

堂守がまくし立てる。

「サン＝タンジェロ城から政治犯が一人逃げ出しました。引き渡した者には褒賞として銀貨千枚、匿った者は縛り首だそうです。共犯の典獄は拷問で白状させられた後絞首台へ送られたそうです」

(やはりな)

四方八方から子供達と市民達が入って来た。礼拝堂がそつと開かれる。誰もそれに気付かない。

(よし)

アンジェロツティが出て来た。人の中へ上手く紛れ込んだ。

「物騒な話だな。ひよつとするとここに警官が来るかも知れないな」

「ええ、閣下もお気を付けた方が良いでしょう。スカルピア男爵は閣下を快く思われてませんし」

「そうだな。そろそろ枢機卿殿が来られるし今日はこれでお終いにするか」

そう言つてアンジェロツティの方を見た。

「そう言われると思つて馬車を用意しておきました」

ゼツナリーノが得意な顔で言つた。

(しめた)

カヴァラドゥッシとアンジェロツティの顔が明るくなった。

「気が利くね。じゃあ正門に回しておいてくれ。それから後片付けも頼むよ。急いでね」

「はい」

チップを渡されゼツナリーノは出て行つた。

教会の中の燭台に火が灯され暗くなりかけた教会を照らし出す。

あちこちの出入口から入って来る市民達の中にアンジェロツティは
潜み正門へ向かっている。

「あ、子爵面白いお話が」

「何だい！？」

堂守が子供がとっておきの話を告白する様な得意そうな顔をして
いるのを見て彼が何を言わんとしているのかカヴァラドゥッシは察
したがあえてとぼけてみせた。

「フランスの小男がマレンゴでまけちゃいましたよ。折角アルプス
を越えてはるばるイタリアまで来たつてのに可哀想な事ですネ！」

やはりそれか、と思ったが知らないふりをした。

第一幕その八

「へえ、そうだったんだ」

堂守の言葉をあつさりと聞き流す事にした。向こうもそれで気が削がれた。

アンジェロツティが正門を出た。カヴァラドゥッシはそれを見送り心の中で笑みを浮かべた。

「人が多くなってきたな。もうこれで帰らせてもらうよ」

そう言うつとすつと帰っていった。扉の入口ですれ違ったゼツナリノに絵の片付けを再度頼むと自分で馬車を駆りそのまま去っていった。二人が絵の片付けに取り掛かうとする中聖歌が流れてきた。その時だった。ドヤドヤと音がして教会へ黒い制服姿の警官達が押し入って来た。教会内が騒然とする中数人の警官を従えた一人の男が辺りを見回しながら入って来た。

濃く黒い後ろに撫で付けた髪に重くそれでいて不気味な、陰惨な光を放つ漆黒の眼、無表情で何処か鉄仮面を思わせるやや細長い筋肉質の顔、黒と赤で色彩られた服、山の様な背丈、古代ローマの剣闘士を思わせる身体、彼こそローマを恐怖のどん底に落とし込んでいる男、秘密警察の首領ヴィットリオ・スカルピア男爵である。

シチリアに生まれた。父は男爵、母はある大地主の娘だった。男爵といつても元は山賊の頭でありナポリ王家に帰順した時に男爵の称号を授けられた。要するにそれまで裏から仕切っていたのが公に治めるゆになったのである。農民達の面倒を見てやる代わりに袖の下や上前を要求する、言うならばヤクザの親分である。それもお上から許されている。元々その大地主の家とは関係があった。その娘と結婚して繋がりを更に深めたのである。

二人の長子として彼は生まれた。幼い頃より柄の悪い者達に囲まれこの地独特の掟を叩き込まれた。若くして父の代わりとして一帯を取り仕切るようになりその手腕は宮中においても注目されるよう

になった。

だがその手腕以上に宮中において彼が彼が有名になった事がある。それは彼自身の悪評であつた。

山賊上がり一族の者なぞ宮中の毛並みの良い門閥貴族達にとつて吐き気もよおすものであつた。その上裏社会に育つた彼は行いも悪かつた。

毎夜如何わしい館に入り浸り手下の者達と謀議を重ねる。逆らう者は片っ端から罪をでっち上げ髑髏殺しその財産を残らず懐に入れた。賄賂を受け取り上前をはねる。その周りを素性の知れぬ人相の悪い者達で固めている。彼を嫌悪するある有力貴族は彼を除くよう王妃に進言したが彼女は取り合わなかつた。彼の悪評より彼の能力を評価していたからであつた。

やがて王妃に取り立てられナポリ王国の共和主義者に対する取締りの責任者に任じられた。

この時ナポリはフランスと結んだ共和主義者達の為全くの無政府状態に陥っていた。彼は着任するなり国王の勅命を以つてナポリ全土に戒厳令を敷いた。そして市民達に共和主義者を連れて来た者には多額の褒賞を与える事を約束した。同時にナポリを混乱に陥れているのは外から来た共和主義者であり彼等こそが全ての元凶であると喧伝した。

スカルピアに煽られた市民達は次々に共和主義者と思しき外国人や不審な者達を捕らえスカルピアの下に連れて来た。その数は数千に及びスカルピアは彼等のほとんどを死刑にし全財産を没収した。これには彼の配下であるシチリア出身のならず者達の力が大きかつた。

戒厳令を敷くと同時に彼はナポリ全土へ手の者達を放つたのである。そして共和主義者達のブラックリストを瞬く間に作り上げたのである。そして市民達を煽り共和主義者達を連れて来させたのである。

無論ブラックリストの中には共和主義とは全く関係の無い者達も

いた。それはスカルピアも承知していたしそうなる事も解かっていた。それが誰かさえ。

では何故そうしたか。袖の下を要求する為だ。賄賂をせしめた後放免する。そしてそれをネタに彼等を脅し自分達の協力者に仕立て上げるのだ。こうしてナポリの対共和主義者秘密警察は作り上げられていった。

秘密警察やスパイを街に放ち市民に密告を奨励する。こうしてナポリ全土の共和主義者達を血祭りにあげていったのである。

それが王妃に認められ不穏な状況となっていたローマに送り込まれた。そしてローマでもナポリと全く同じ事をした。

元ローマ共和国領事アンジェロツティ候を捕らえた時王妃にすぐに獄中で暗殺する様指示された。密かに行うつもりであったがその話が何処からか漏れた。否その考えはアンジェロツティの実家に容易に読まれていた。脱獄された。このまま逃げられれば自分の首が危ない、そう直感した。

ナポリでのやり方が余りにも狡猾で残忍であった為彼を嫌う者はこの上なく多かった。流石に王妃も庇いきれないようになっていた。まして共和主義者の中でも大物中の大物であるアンジェロツティを逃したとあれば……。王妃と親しいエマ・ハミルトンの事もあり肅清される、そう確信していた。今彼は将にダモクレスの剣の下にいたのだ。

「出口は全て押さえる。猫の子一匹見逃すな、獲物は悪賢いぞ」
低く野太い声で指示が出される。警官達が一斉に散る。それを見て教会の中の市民達は恐れおののいている。

第一幕その九

「氣にするな。礼拝の準備をしろ。今日は戦に勝った事を祝わねばならない」

市民達はまだ怯えながらも動き始めた。堂守もその中に入ろうとしたがスカルピアに見つかってしまった。

「おい、その堂守」

「はい」

恐る恐るスカルピアの方を振り向いた。

「聞きたい事が有る。こつちへ来い」

「はい」

蛇に睨まれた蛙の様に竦みながらも来た。

「ここに囚人が一人逃げ込んだとの情報が入った。名はチエーザレ・アンジェロツティ。その男の家の礼拝堂がここにあつたな。そこに用が有る。何処だ」

震える手で礼拝堂を指差す。

「スキャルローネ」

「はい」

名を呼ばれた赤髪の人相の悪い大男が二人の警官を引き連れ出て来た。

「礼拝堂をさがせ」

「はい」

スカルピアの指示に従い礼拝堂の中を調べる。すぐに一つの扇を持ってきた。

「扇か」

扇を手に取り調べ始める。要に彫られた紋章が目に入った。

「アッタヴァンティ家の紋章か。どうやら奴の妹が手引きしたのは間違いないな。もう逃げた後か」

扇をスキャルローネに返した。

「大砲を使ったのは失敗だった。獲物に逃げられてしまった。・・・
・・・ん!?」

ゼツナリーノが後片付けをしている絵が目に入った。

「本人がこんな所にいるとはな。マグダラのマリアの様だがまだ未完成みたいだな。描いているのは誰だ」

「マリオ」カヴァラドウツシ子爵です」

「あのフランスかぶれか。中々尻尾を出さないが格好や経歴を見ただけでも怪しい奴だ」

堂守の答えに忌々しげに顔をしかめる。

スカルピア達が教会中を調べ回っている最中にゼツナリーノは後片付けを終え遠くに置かれたままにしてあった籠を持ってスカルピアの前を横切ろうとする。

「待て」

呼び止められた。思わず身体が硬直する。

「御前が手に持っている籠は何だ」

「閣下のおやつを入れた籠ですが」

「見せてみる」

ガタガタと震える両手で籠を差し出した。

奪い取り中を改める。何も無い。

「随分と大きい籠だな。子爵はいつもこれだけ召し上げられるのか？」

「いえ、今日はお腹が空いてないと仰っていました」

ブルブルと顔を横に振り否定する。

「そうか、良く解かった。堂守、もう一つ聞きたい事がある」

「はい」

完全にすくんで動けない。

「子爵の他に誰か来たか」

「子爵のお兄様です」

「伯爵殿か。他には？」

「他は・・・」

絵に捧げてある花束に気付いた。

「花束が捧げられてますね。トス力様が来られたみたいです」

「トス力、フローリア」トス力か」

スカルピアの眼に邪な光が宿った。

「神と王家には忠実な女だがあの男の恋人だったな。目をつけておくか」

意味ありげである。そのと寺院の正門から紅衣に身を包んだ枢機卿が行列を従え入って来た。市民も聖歌隊も警官達も恭しく頭を垂れる。スカルピアでもある。

（これからどうするかだ。思わぬ方向へ話がいくかもな）
頭を垂れながらも謀を巡らせていた。

「コロメツティ」

一同頭を上げると側に控える薄い茶髪のずるそうな小男を呼んだ。
「捜査は終わりだ。マレンゴの勝利への感謝を主と聖母様に捧げた後ファルネーゼへ帰るぞ」

「はい」

スカルピアと警官達も会衆に加わった。教会の中の全ての者が歌う賛歌『テ・デウム』とオルガンが教会中に鳴り響いていた。

神である貴方を私達は誉め讃え

主である貴方を私達は信じます

全ての者は永遠の父である貴方を崇めます

第二幕その一

第二幕 ファルネーゼ宮殿

ローマには多くの歴史的建造物がある。コロシラムの様に帝政ローマの頃からあるもの、サン・ピエトロ寺院の様にルネサンス期に建てられたもの等時代も建築様式も多岐に渡っている。

ファルネーゼ宮は後者に当たる。時の枢機卿アレッシサンドロ・ファルネーゼによって建てられた為その名が冠せられた。

後に法皇となりパウロ三世となるこの枢機卿は神に仕える身ではあったが神に仕えてはなかった。彼は元々宗教に関心を持たぬ所謂ルネサンス的人物であり、最大の関心は地位と権力、富、そして美女であった。ルネサンスの時代だけでなく何時の時代でも何処の場所でもこうした人物はいるものであるが群雄割拠の状況であり聖俗の権力がアラベスクの如く複雑に絡み合ったこの時代のイタリアにおいてはこうした人物が目立っただけである。

『右手に奸智、左手に謀略』と揶揄されたアレッシサンドロ六世とその長子チエーザレ・ボルジアはあまりにも有名であるが彼等ボルジア家の政敵ローヴェレ枢機卿もそうであるしあの富豪メディチ家もローマ・カトリック教会と深い繋がりを持ちその栄華を誇っていた。そういった時代であった。

パウロ三世も先のアレッシサンドロ六世と同じく法皇という名の第一級の政治家でありこのままだと贅を極めた君主としてのみ後世に名を残していたであろう。だがこの時北の平野にある人物が出て来た。

その者の名はマルティン・ルター。大食漢で大酒飲みで世話好きで子煩悩であったが同時に極めて清廉潔白な宗教観の持ち主であった。彼が教会の世俗化と腐敗に対し異議を唱えたのである。

ローマはすぐに彼に破門を言い渡したがその程度で引込む男ではなかった。過激な発言と行動を繰り返し何時しか神聖ローマ帝国

全土を巻き込む大騒動となった。

混乱はローマにも飛び火した。それは大火事となった。神聖ローマ帝国軍とルター派新教徒、そして教皇軍がローマで衝突したのである。世に言う『サツコ・ディ・ローマ』である。

帝国軍と新教徒達はローマ中で暴れ回った。所々で略奪と虐殺という名の血の宴を開き建物は破壊され火が点けられた。聖アンドレの聖骨は地面に投げ付けられ聖ヨハネの聖骨は蹴球にされた。数万の市民が殺されティベレ川へ投げ棄てられ路という路は堆く積み上げられた屍で埋められた。人の首や手が宙に飛び交い血が汚物と混ざり街を彩った。ローマは死の街となった。パウロ三世は枢機卿の時にこの混乱に巻き込まれ命からがらサン・タンジェロ城に逃げ込んだのである。

そうした経緯から彼は新教徒達を激しく憎むようになった。法皇に即位すると先頭に立つて宗教戦争を繰り広げ異端取締の為『聖丁』を設けイグナティウス・ロヨラやフランシスコ・ザビエル等ルターに勝るとも劣らぬ過激な修道僧達が作った『イエズス会』を修道会として認知し厳格なカトリックの教義を広めさせた。さらにトレントで公会議を開きローマ・カトリック教会の権威を取り戻した。彼のこうした行動により旧教徒と新教徒の憎悪と殺戮、異端審問による陰惨な魔女狩りが欧州全土を覆ったとも言える。

このような人物であるから歴史において彼の評判はすこぶる悪い。だが芸術においてはその評価は高い。

ミケランジェロにステイーナ礼拝堂の大祭壇画『最後の審判』を描かせ、またサン・ピエトロ寺院の大ドームを完成させた。

ファルネーゼ宮もそうした彼の芸術における業績の一つである。反宗教改革の盟主である彼の強固な意志と贅と美を好む気性を反映しこの宮殿は他に多々建てられているローマの建造物のどれにもひけを取らない威風堂々たる建造物であった。広い中庭を持つというローマ建築の主流であるローマ様式の建物であり、その中庭を多くの部屋が取り囲み、各部屋には中庭に向かってロジックという独特の

涼みの為の廊下が付けられている。大広間は上の階にありバルコニーと繋がっている。宮殿の正面はエジプトから取り寄せた花崗岩で造られた噴水が二つ置かれている。この二つの噴水のみならず宮殿全体はアントニオ・ダ・サン・ガロの設計によるものであるが、彼がこの世を去るとミケランジェロが後を継いだ。彼は宮殿の上階を担当し、軒蛇腹と中庭側の正面の三層は彼が担当した。ミケランジェロが没すると彼の後継者ジャコモ・デラ・ポルタが師の仕事を引き継ぎ完成させた。この時ファルネーゼはこの世にいなかった。

正門の入口は馬に乗ったまま入られる事からも解かるようにかなり大きい。大きいだけではない。豪華であり壮麗である。その威容はローマのどの建築物にも比肩し得る。後の人はこう評した。

「アレツサンドロ・ファルネーゼはローマで最も美しいものを三つも持っている。——一つはイエズス会のジエズ教会、一つは彼が神から授けられた一人娘、そして彼の一族の宮殿であるファルネーゼ宮殿」

残念な事にファルネーゼの娘を見た者はローマにはもういない。

だがジエズ教会とこのファルネーゼ宮殿はローマの誰もが知っている。そしてその美しさを知っている。宮殿の大広間は多くの燭台で照らし出されている。その中を着飾った者達がいる。バルコニーの下にも灯火が輝き明るい広場をローマの市民達が埋めている。広間の中には演奏台や大姿見、テーブル、そひて玉座が置かれている。テーブルでトランプに興じている者達がいる。

第二幕その二

「司教、ローマは如何ですか」

黒い髪に灰色の瞳の男がカードを切りながら向かいの白い髪と鳶色の瞳の男に問うた。

「満足しておりますよ、カプレオラ男爵。噂に違わぬ素晴らしい都です」

司教はニコリと笑って言った。

「そうでしょう。この街は一度住むと離れられなくなります。この街に虜になってしまつて」

切り終えたカードを司教に配る。

「モンペリエをジャコビーニに追われた時はどうなるかと思いましたが。一生ここに住むのも悪くないですな」

「そうでしょうとも」

カードを手取る。

「唯一つ不満がありますが」

「それは何です!？」

ピタと手が止まる。

「カードで勝てない事です」

それを聞いてカプレオラ男爵は思わず噴き出してしまった。

「ハハハ、これはちょっとしたコツがあるのですよ」

「コツ……!？」

「はい。賭け方がありましてね。その通りにやれば勝てるというものです。実は私もある方に教えて頂いたのですが」

「どのような賭け方ですか?そしてそれをご存知の方は一体どなたですか?」

「はい、それは……」

その人物の名を言おうとした時二人の座るテーブルの横を誰かが通り過ぎた。

「あ、さつき通り過ぎられた方です」

見れば赤い炎の様な色の上着とそれと全く同じ色のズボンを身に着けた小柄な男である。髪は茶がかった金である。後ろ姿なので確かな年齢は解からない。

「!？」

その後ろ姿を司教は何処かで見た様な気がした。だがよく思い出せない。

「どなたですか？」

「ザラストロ伯爵という方です。ついこの間ワイマールから来られた方でしてね。まだ四十程ですが様々な事に造詣の深い方でいらっしやいますよ」

「成程」

ふとある人物の事が脳裏に浮かんだがすぐに打ち消した。

(そんな筈が無いな。あの方はもうこの世にはおられぬ)

フランスで誰もが知る人物、だが何処に生まれどのようにして育ちどうやって生きているのか誰も知らなかった男。霧の様に何処かへ去りそして姿を現わさなくなった。森羅万象ありとあらゆる事を知りどんな事も器用にこなした男。ある者は彼を錬金術師と言いある者は彼を山師と言った。その男の名は歴史の謎の部分にしかと刻まれている。

大広間の中で貴族達が遊びに興じたり談笑したりしている。戦いに勝利を収めそれを祝うとあってどの者の顔も晴れやかである。

ただ例外もいる。茶の髪と瞳をした細身で中背の男が何やらせわしなく歩き回っている。

名をジュゼッペ・アッタヴァンティという。アンジェロツティの妹の夫であるアッタヴァンティ候である。

この人物の評判はパツとしない。凡庸で小心な人物であり風采も冴えない事から宮中でも忘れられがちである。美人で頭も良い夫人とは全く不釣り合いな人物とよく陰口を叩かれている。善良であるが消極的で人付き合いも不得手でありかつ無気力な人物の為彼と親し

い者も少ない。

何やらそわそわと歩き回っている。何か気になる事でもあるのだろうか。不意に誰かに呼ばれた。

「侯爵、どうなされました」

アルトウーロ＝カヴァラドゥツシ伯爵である。ゼノアでの武勲により王妃から直々に勲章を賜ったのだ。

「あ、伯爵、どうしてここに？」

「オルロニア公爵夫人に頼まれ事がありまして。侯爵を呼んで頂きたいと」

王妃付きの女官である。金髪碧眼の長身の美女であり頭の回転が早い。王妃の側近である。

「どちらです？」

「こちらです」

大広間を出て廊下を挟んで前にある階段の前に夫人はいた。何やら意味ありげな微笑を浮かべている。

「侯爵をお連れ致しました、マダム」

「有り難うございます、伯爵」

「どう致しまして。では私はこれで」

「ご武運を」

アルトウーロ＝カヴァラドゥツシは二人に一礼し階段を降り宮殿を後にした。すぐ馬に乗りマレンゴに向かった。

第二幕その三

「さて侯爵」

カヴァラドゥッシ伯を見送るとオルロニア公爵夫人はアッタヴァンティ候に向き直った。

「お聞きしたい事があるのですが」

「な、何です!？」

優雅に微笑む夫人に対し侯爵は狼狽している事が一目で解かる。それが夫人にとっては楽しいようだ。

「奥方は今どちらにおられます?」

悠然とした笑みの中で青い瞳がキラリと光った。その光に気付いた侯爵は更に慌てた。

「フ、フラスカティですが、そ、それが!？」

「いえ、唯お聞きしただけです」

目を閉じて言った。疑われている、冷や汗が背筋を伝う。

「ひ、一言言わせて頂きますがアンジェロッティ候の逃亡については家内も私も全く関係ありませんぞ」

声が震える。演技ではない。それも手に取るように分かる。

「あらあら、そんな事お聞きしておりませんわよ」

「で、ですが……」

「まあまあ気を落ち着けになられて。もう一度確かめたいのですが奥方は今どちら?」

「フラスカティです」

「分かりました。お時間を取らせて頂き有り難うございました。それでは宴をお楽しみ下さい」

「……はい」

アッタヴァンティ候は逃げる様に大広間へ戻って行った。その時階下で何やら話し声がした。

「あら」

見ればスカルピアである。不機嫌そのものの顔で部下達と何やら話している。

「子爵の消息は掴めないか」

「はい。お留守でした。捜査令状を盾に家の隅から隅まで捜しましたが使用人達がいるだけで。昼も夜も家を空けられる事が多いらしく何処かに隠れ家があるそうです」

スキャルオーネが報告する。

「使用人は何と言っている」

「誰一人として知りません。どうやら相当用心深いようです」

「そうか。で、トス力は？」

「パイジエツロ先生の邸宅で打ち合わせと軽いりハーサルの後自宅で食事と身支度を済ませ先程この宮殿へ来られました。カヴァラドウツシ子爵の気配は何処にもありません」

コロメツティが報告する。

「糞っ、つくづく隠れるのが上手い奴だ。このローマは歴史と共に街が造られた。迷路の様に入りくんでいる。奴はローマの人間だ。この古臭い街の何処かに消えて今頃我々を嘲笑っているぞ」

「はい」

「そしてそのままローマを去り頃合いを見て舞い戻って来るつもりだ。我々が陛下の御不興を蒙り首が飛ぶのを見届けてからな」

「はっ……」

部下達の顔が暗くなる。宮中における自分達の評判を最も良く知っているからだ。

「だがそうはさせん。スポレッタ警部、アッタヴァンティ侯爵夫人は今何処だ？」

「はい」

薄い茶髪の小男が答えた。

「フラスカティに行かれお留守でした」

「それは知っている。だがな、我々が近寄って来ないのでそれが気になっている筈だ。おそらく夫人の方からローマへ戻って来て嫌疑

を打ち消す為ここへも顔を出すだろう。その時に白状させる。どんな手を使ってもな。場合によっては捕まえるぞ」

「えっ、宮中にも強い影響力をお持ちの侯爵夫人をですか？」

懷から扇を取り出した。

「これが何よりの証拠だ。それにトスカも関与しているかも知れぬ」

「それはまさか」

「否定出来るか」

「えっ、いえ………」

スポレッタはスカルピアに睨まれ萎縮した。

「ナポリでもこのローマでも解かった筈だ。誰が何をしているか、全く知れたものではない。知らぬうちに利用されていたりするからな。だが………」

「だが……？」

スカルピアは続けた。

「子爵は賢い。女を危険に巻き込む様な事はしないだろう。足跡は消してある筈だ」

「はい」

「今から陛下にお目通りして来る。情報も集めて来る。私が合図するまで待っている」

「はっ」

部下達は敬礼し門から出て行った。スカルピアは階段を昇り大広間へ向かった。

第二幕その四

「あら長官、お元気そうで」

入口でオルロニア公爵夫人と会った。おそろく上で話を聞いているのだらう、何やら皮肉な笑みを口の端に微かに浮かべている。

忌々しい女だ。心の中で舌打ちしたが顔には出さず会釈する。

「今晚は、マダム。本日もお美しくいらっしゃる」

スカルピアはこの夫人が嫌いだった。代々伝わる名家の出身である彼女は成り上がり者のスカルピアを嫌い何かと王妃に彼の悪評を耳に入れていたからだ。

「どういたしまして。ところで夕刻大砲が鳴りましたわね。如何いたしましたの？」

眼に侮蔑の光が宿る。脱獄の件をあからさまに皮肉っている。

「鼠が一匹消えましてね。今猫達に追わせているところです」

「あら、あの小汚い猫達ですの？」

スカルピアの眼に殺意の光が宿った。だが彼はそれをすぐに消した。

「それは誤解ですな。極めて優秀な猫達ですぞ」

「まあシチリアやナポリでたっぷりと食べて大きくなりましたからね。どなたかと一緒に。随分と走り回っていたし、足も速いでしょう」

「・・・・・・・・・・」

言い返そうとしなかった。怒りで顔と手が真っ白になっていた。

「まあお気をつけあそばせ。もし鼠がローマから逃げ切ったら猫達も無事ではありませんし」

「・・・・・・・・・・はい」

「それでは私はこれで。陛下をお迎えしなくてはなりませんので」
そう言うと小馬鹿にした顔で去って行った。その後姿をスカルピアは忌々しげに見ていた。

（フン、今に見ておれ）

大広間に入る。誰もスカルピアには近寄ろうともせず声も掛けない。

肉を口に入れた。葡萄酒で流し込む。

暫くしてパイジエツ口に連れられトスカが大広間に入って来た。大広間からどよめきの声が聞こえる。

男達がトスカの周りに集まり次から次に先を争う様に彼女の手の甲に接吻する。その手にあるブレスレットはルビーとサファイア、そしてダイヤモンドで飾られている。カヴァラドゥツシからの贈り物である。

男達がトスカの周りから去ると今度はスカルピアが近付いて来た。他の男達と同じ様にトスカの手に口付けをする。

「男爵、脱獄囚はもう見つかりまして？」

立ち上がったスカルピアに対しトスカは言った。その言葉に隣のパイジエツ口は色を失った。だがトスカはそれには気付いていない。「それが貴女にどういう関係があるというのです!？」

不機嫌そのものの顔でトスカに答える。同時に極めて用心深くトスカの顔色を窺う。彼女の反応を探っているのだ。

「ええ。牢獄からようやく逃れる事が出来た気の毒な方ですから」

「ほう、それはお優しい事で。では一つお聞きしましょう、その人が貴女の家の扉を叩いたならば貴女は一体どうします？」

「開けてあげますわ」

「では貴女はその囚人と一緒にサン・タンジェロ城に入る事になりますな」

スカルピアはトスカに釘を刺した。同時に一貫してトスカの顔を見ていたが結論が出た。白だった。またもや心の中で舌打ちする事となった。

周りを見回す。誰もスカルピアと顔を合わせようとはしない。情報も集まりそうにはない。渋い顔をした。その時だった。王妃の到着を伝える声がした。

それまで広間中に散らばり談笑し酒や料理を楽しみ賭け事に興じていた一同が左右に整列した。今までカンタータを鳴らしていた樂者達は国歌を演奏していた。

大勢の従者達を従え王妃マリア「カロリーネが入って来た。豪華な絹の白いドレスに身を包み手には王妃を表す杖が、そして頭には冠が被せられている。ブロードのやや巻いた髪、青く強い光を放つ瞳、整った細い顔立ちに大きな特徴が幾つか見られる。

驚の様な鼻、厚い唇、やや出た下顎、それ等の特徴が彼女の出自を表わしていた。

ハプスブルグ「ロートリンゲン家、神聖ローマ帝国皇帝として欧州全土にその権勢を誇示する欧州きつての名門である。

かつてはスイスの一地方貴族に過ぎなかった。だがこの家のある者が神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ一世として即位するとその地位は一変した。以後婚姻政策を中心とした積極的な外交政策によりその勢力を拡大していく。

ウィーンを本拠地としてオーストリア、ドイツはもとよりハンガリー、チェコ、スペイン、ベルギーそしてイタリアへとその勢力は広がっていった。先に出たカール五世もハプスブルグ家出身である。彼だけでなく『忠誠最後の騎士』と謳われたマクシミリアン一世、スペインの絶対君主として君臨し『日の沈まぬ国の王』と称されたフェリペ二世もこの家の者であった。ハプスブルグ家の力と血は欧州を長きに渡って支配していた。教会が心ならばハプスブルグ家は背骨である、とある歴史家が書いた様に。

第二幕その五

多くの高名な君主を出したハプスブルグ家であるが最も偉大な人物を挙げよ、と言われてこの人物を挙げる者は多い。マリア・テレジア。オーストリア中興の祖とされ神聖ローマ帝国の事実上の女帝、国母としてオーストリアを、そして

ハプスブルグ家を支えた偉大な人物であった。

彼女が父の後を継ぐや否やプロイセン、バイエルン、フランスといった周辺諸国がその継承権に異を唱え宣戦を布告した。世に言う『オーストリア継承戦争』である。プロイセンにシュレージアを奪われながらも何とかこれを凌いだ彼女は内政及び軍事での改革を断行すると共に長年対立関係にあったフランスのブルボン家と同盟を結んだ。『外交革命』である。次に以前より同盟関係にあったロシアとも繋がりを強めここにオーストリア、フランス、ロシアによる三国同盟を完成させた。欧州の外交史にその名を残す『三枚のペチコート』が完成した。ペチコートの狙うはサン・スーシーでコーヒ―ばかり飲み神も教会も無視し女性を侮蔑してやまない男、三国にとって今や目の上のたんこぶとなった成り上がり者、プロイセンのフリードリヒであった。

彼が気付いた時事態はとんでもない事になっていた。周りはオーストリア、フランス、ロシアに取り込まれており四方から大軍が迫って来ていた。だが彼も大王と呼ばれた男である。自ら軍を率い戦場を駆け回った。幾度となく命を落としそうになったが生き残り戦い続けた。そしてプロイセンを守りきった。『七年戦争』である。

勝てはしなかったが当代一の軍略家フリードリヒ大王を相手に一歩も引かなかった事はマリア・テレジアの名を欧州に知らしめる事となった。優れた人材を抜擢し内政、軍事の改革によりオーストリアは中欧に確固たる地位を築くようになっていた。それは文化や芸術にまで及びウィーンは『音楽の都』とさえ呼ばれるようになった。

音楽の神の寵愛を一身に受けたあの若者モーツァルトも彼女の前でその天より授けられた才を披露した。

また彼女は良き母でもあった。愛する夫フランツ・フォン・シュテファンとの間に十六人の子をもうけ限り無い愛を注いだ。後のオーストリア皇帝ヨーゼフ二世も、フランス革命の際断頭台の露と消えた悲劇の王妃マリー・アントワネットも彼女の子であった。

マリア・カロリーネもまた彼女の子であった。母親譲りの統治能力とカリスマ性を併せ持ち、ナポリ王国を事実上支配していた。性格は苛烈にして果断、また幼い頃より共に遊び可愛がっていた妹を殺された事からフランス革命政府及びそれに与する者達を激しく憎悪していた。

王妃は進んでいく。後には従者達だけでなくアラゴン公やオーストリア軍の將校達、そして各国の大使達もいる。広間にいる者達は皆王妃に礼をする。玉座の前に着くと向き直り一同に宴を楽しむよう言った。広間からも階下からも王妃を讃える声がした。シャンパンが次々と栓を放たれ乾杯の声が木霊する。

王妃は賑やかな宴の中に入った。そしてトスカとパイジエツコの前に来た。

「あ、王妃様」

二人は王妃に跪き手の甲に接吻をした。王妃は二人を立たせると優雅な笑みを浮かべてトスカに問うた。

「フローリア、喉の調子はどうですか」

「はい王妃様、今宵は王妃様に満足して頂けると存じます」

「それは何より。楽しみにしていますよ」

「はい、有り難うございます」

「それにしてもパイジエツコはそなたに謝らなければならない事が一つ有る様に思えるのだけど」

「えっ？」

トスカは解らなかったがパイジエツコはギクリとした。パイジエツコがナポレオンに招かれてパリに行き、彼の為に作曲した事を皮

肉っているのだ。

「陛下、この者は罪有りとはいえ悔悟の情有りと見受けられますが」
スカルピアが口を挟んできた。

「おやこれは男爵」

皮肉な陰を込めた笑みを浮かべてスカルピアに顔を向けた。

「他人の事よりもアンジェロツティを逃がした此度の事件がそなたの不幸にならなければ良いのですが。そなたは敵が多いようですから」

「申し上げますが陛下と同じ敵かと存じます」

スカルピアも流石だ。負けてはいない。だが王妃も引かない。

「それに彼の者の妹は美しく、裕福ですし。まあこれはどの者も知っている事だけだ」

好色で袖の下に弱いと言われるスカルピアに対し暗に当てつける。
だがスカルピアも伊達に今の地位まで来たわけではない。

「陛下は私に何か後ろめたい事があるとでも言われるのですか」

怯まない。とそこへ従者が王妃に演奏の準備が出来た事を知らせに来た。

「そうですか、解かりました。フローリア、準備はよろしいですか？」

「はい」

王妃に会釈し演奏の場へと向かった。そこに置かれている台に登った。パイジェツ口が指揮棒を手に取り曲が始まった。

高く澄んでいてそのうえ美しい声である。幾十もの色彩りのの宝玉を転がす様に歌われたかと思えば小河の清らかなせせらぎの様に、そして庭園に咲き誇る紅の薔薇の様に、激しく赤い血潮の様に、それから一変して夜の冷たく澄んだ森の中の湖に映る白銀の満月の様に、次々と色彩りを買え歌われるその歌はその場にいた全ての者を魅了した。その歌声と技量に誰もが言葉を失った。

「・・・・・・・・・・」

歌うトスカの姿も美しかった。その場に応じその美しさを変え時

に楚々と、時に激しく、時に祈り深く、時には艶やかだった。これがトスカの魅力の一つでもあった。歌だけでなくその美貌でもイタリアに知られていたのだ。

スカルピアもその一人だった。だが彼は他の者とは異なる感情を抱き始めた。この女を自分のものになりたいと考えた。どの様な手段を使っても奪ってやりたいと思った。

カンタータは終わった。広間からは割れんばかりの拍手が沸き起こった。階下の広場からも歓声が轟く。やがてそれはナポリ王国とオーストリア軍、そして王妃を讃える声となっていた。

「陛下、民達が貴女を讃えています。愛すべき彼等に陛下の慈しみをお示しになって下さい」

アラゴン公が慇懃に会釈し王妃に頼む。王妃はその頼みに対しバルコニーへ進み微笑みでもって応えた。

第二幕その六

「フローリア、貴女も」

王妃に誘われトスカもバルコニーへ進んだ。そして王妃にやや遅れてバルコニーへ姿を現わした。

「王妃様万歳！王妃様万歳！」

バルコニーに王妃が姿を見せたのを認めるとローマの市民達は更に声を大きくして叫ぶ。王妃は喜び手を振っている。

「トスカ！トスカ！」

トスカにも声を送られる。トスカも恥ずかしそうに手を振る。

声は続く。やがて別の声も混ざってきた。

「フランスを倒せ！共和主義者を倒せ！アンジェロツティを倒せ！」

最早市民達の中にもアンジェロツティを快く思わない者がいた。多くの者にとつてフランスと同じく共和主義者もまた歓迎されざる者達だったのである。

「聞きましたか男爵。ローマの者達はアンジェロツティの首を求めていますよ」

王妃がすぐ後ろに控えていたスカルピアに声をかけた。広場の民衆はスカルピアの姿を認めると言葉を変えた。

「スカルピアを倒せ！スカルピアを倒せ！」

スカルピアの評判は共和主義者達のそれよりも悪かった。シチリア出身の成り上がり者でその上得体の知れぬ柄の悪い者達の主であるからそれは至極当然であった。

「今度はそなたの首」

王妃の言葉に広間にいた者も広場にいた者も皆笑った。スカルピアは苦虫を噛み潰した様な顔になった。

王妃がバルコニーから去るとトスカもスカルピアも広間へ戻った。トスカは先程フランスの司教が後ろ姿だけ見た紅衣の男に声をかけられた。

茶がかつた金の髪に猫の様な緑の瞳を持っている。知的だが何処か悪戯っぽさを含んだ顔立ちをしている。左手には何やら不思議な色の指輪がある。紅の衣は一見絹に見えるが絹ではなかった。この様な衣は今まで見た事が無かった。何の生地で出来ているのだろうか考えた。

「この衣ですか？牛の乳から作ったのですよ」

男はトスカの思っている事を読んだかのように言った。

（何でこの人私の考えている事が分かったのかしら？）

トスカはそう思ったが別に不思議だとも考えなかった。純真な彼女は自分の考えている事をよく当てられたりしたからだ。それよりも牛の乳から服が作られた方がより不思議であつた。

「牛の乳、からですか？」

「はい。少しコツがありましてね。まあいずれ皆が着るようになりますよ」

「はあ」

男の悪戯っぽい笑みとその言葉に狐につままれた様な気になった。牛乳とは飲むものであり加工して食べるものなのにどうやって。どうしても理解出来なかった。からかわれているのかと思った。

「おっとつと、からかいに来たのではありませんよ」

「はい」

また読まれた。それ程表情は出していない筈なのに。

「実は貴女にお渡ししたい物が一つありましてね」

「何でしょうか」

「これです」

懐からある物を取り出した。それは銀色に輝く大きな十字架であつた。

「十字架、ですか」

「はい。貴女にはよく似合つと思ひまして。きっと貴女を御護り下さる筈です」

「よろしいのですか？私なぞに」

「貴女だけではありません。貴女の愛しい人も御護り下さいます」
「そうでしょうか。あの人はあまりこういった事は……」
少し苦笑した。だが男は自信を湛えた満面の笑みで答えた。

「そんな事はありませんよ。この十字架に貴女と彼はきつと感謝する筈です」

「そうでしょうか。でしたらあの人が私にだけ振り向いてくれますように」

そう言つて十字架を受け取り十字架に対して祈つた。そして男に對し礼を言つた。男はそれに返礼をすると人ごみの中へ入つていった。

スカルピアは広間の端の方で思案に耽つていた。今自分の置かれている状況とそれに対する対策である。

（アンジェロットイに逃げられた事は痛いな。オルロニア公爵夫人はここぞとばかりに陛下に讒言してくる。今この場でも）

オルロニア公爵夫人の方を見る。こちらをチラリ、チラリと見ながら王妃に何やら囁いている。

（公爵夫人だけではない。この広間にいる奴等も下の広場にいる連中も皆このわしを地獄に叩き落そうとしている。糞つ、あのイギリス女が妙な事を言わなければこの様な事にはならなかったというのに）

忌々しげに飲みかけの杯を置く。長く溜息を吐いた。高ぶりだしていた気が落ち着いてきた。

（落ち着け。だとすれば逃げた男を捕まえば良い。おそらくマリオカヴァラドウツシが匿っている筈だ。あの男を探し出せばそこにアンジェロットイもいる。だが用心深い奴の事だ。姿を現わす頃にはアンジェロットイは高飛びしている。奴は無理にしても奴の妹ならこの扇を証拠にして捕まえられる）

懷から扇を取り出し手に取る。

（とにかくカヴァラドウツシの居場所を突き止めなければならない。知っているとするば……。使用人共は誰も知らん。

おそらく秘密の隠れ場所にいるな。だとすれば兄のアルトウーロ^{II} カヴァラドゥツシ伯爵、は無理だな。もうマレンゴへ向かった。それに伯爵に感づかれてはまずい)

もう一つ厄介な事に気付いた。カヴァラドゥツシの兄に気付かれ
ては全てが終わるのだ。

(オーストリア軍きつての将だ。こちらからは手出しが出来ぬ。唯
でさえわしが弟をマークしている事に不快を示しているというのに
アンジェロツティに逃げられぬうちに伯爵に気付かれぬ様に。わし
の首が飛ぶより速く、か。さてどうしたものか)

扇から目を離し考え込んだ。ふとトス力が目に入った。何やら多
くの淑女達と話し込んでいる。

(トス力はある男の恋人だ。だとすれば奴の隠れ家も知っているや
も知れぬ。だがどうすれば)

その時ある考えが脳裏に閃いた。

(そうだ、トス力は情熱的で直情的な女だ。奴が女にもてるのみい
つも焼き餅を焼いていたという。それを使おう。それに・・・)

先程の歌を唄った時のトス力の姿が思い出された。トス力に対し
邪な欲望が首をもたげはじめていた。

(あの男が消えればわしのものに出来るかも知れぬ。獲物が多くな
るかもな)

顔がトス黒くなる。鉄仮面の様に表情に乏しい顔だがそれが変色
していく。

(だがどうするかだ。待てよ)

手にする扇に気付いた。そしてある劇を思い出した。

(この前見た『オセロー』とかいうイギリスの劇でイヤーゴという
男はハンカチを使って事を運んでいたな。それではわしは扇を使う
とするか)

再びトス力に目をやる。何も知らずに楽しくお喋りに興じている。
(あの女が嫉妬深ければおそらく一直線にカヴァラドゥツシの下へ
行くだらう。嫉妬に狂った女鷹に比べれば警官なぞものの数ではな

いわ)

笑みを仮面の下に隠しながらトスカに近付いていく。スカルピアを見て淑女達は潮の様に引いていく。

手を取った。あえてわざとらしく親しそうに言った。

「トスカさん、貴女のこの美しい手に冷たい手錠を架けるのも、あのサン＝タンジェロ城へ送るのも全て私の一存でどうとでもなるという事を御存知ですか」

露骨に脅しをかける。普段は陰に陽に仕掛けるがあえて露骨に仕掛けた。その言葉を聞いた者は思わず顔を顰めた。スカルピアはこういった言葉を出す時必ず畏を張っているからだ。そして当のスカルピアは周りの視線を無視した。

第二幕その七

「貴女のそのブレスレットはルビーとダイヤモンドとサファイアで飾られている。まるでフランスの国旗だ。その件で手錠をお架けしてもよろしいのですよ」

「？」

トスカは彼が何を言っているのか解からなかった。悪ふざけかと思つた。それに構わずスカルピアは続ける。

「それよりも貴女を異端者としてサン＝タンジェロ城へ送ろうか」

「私を、ですか！？」

この言葉にトスカは驚いた。自分の信仰の篤さと王妃への忠誠は誰もが知っていると確信していたからだ。

「はい。貴女は教会でジャコバン派の者とお会いしていたので」

トスカはその言葉を聞きその事が、とホツとした。だが彼女は氣付いてはいなかった。スカルピアの罠に落ちた事を。そしてスカルピアの親しげな仮面の下の邪悪な笑顔を。

「あの方は私に見も心も捧げてくれています。御心配無く」

「そうですね」

スカルピアはあえてにこりと笑つた。そして懷からあれを取り出した。

「それでは安心してこれを返す事が出来ます」

扇をトスカに手渡した。

「これは………！？」

トスカは扇を手にして呆氣に取られた。

「タ刻サン＝タンドレス＝ヴァツレ教会で拾ったものですが。貴女の物でしょう？」

その時扇の紋章が目に入った。トスカの顔が割れた。否、割れたかと思える程の驚愕だった。

「これは私の物ではありません！」

「えつ、それでは何方の物です？」

スカルピアはここでも演技をした。驚いてみせる。

「扇にあるこの紋章はアッタヴァンティ家のもの、これはあの夫人・
・・・・」

「ああ、そういえば教会のあの絵はアッタヴァンティ侯爵夫人によく似ていますな」

スカルピアの言葉にトス力は火が点いた。事を完全に理解した、と思った。そう、思ったのである。

「やっぱりあの教会で会っていたのね、私の目を盗んで」

一人酒を飲んでいるアッタヴァンティ侯爵の所へ行く。怖ろしい剣幕で詰め寄り問い質すトス力に何も知らない侯爵はタジタジとなる。しかも多少ぼんやりしたところのあるこの侯爵は当の扇が誰の物なのか解からない。仕方無く妻の情友であるトリヴェルディ子爵を呼んだ。

情友とは妻や夫以外の恋人の事である。今で言うと愛人となるだろうか。ただし今の愛人とは違い当時のイタリアではこの情友と愛人は似て非なるものであった。愛人とは一目を盗んで相手の下へ入り込み誘惑し、相手の妻や夫の名誉や面目を損なわせる恥知らずな輩達のことであり、日本でよく泥棒猫だの女狐だの間男だのと呼ばれる連中と言えば解り易いか。これに対し情友とは相手の妻や夫公認の第二第三或いはそれ以上の立場の恋人である。情友とは天からも認められた堂々たる恋愛崇拜者であり、相手の妻や夫の許しの下節度と慎みをもって相手に近寄り機嫌を取るのだ。開けっ広げな恋愛観を持つイタリア人ならではの存在と言えよう。

もっともイタリアだけでなく当時の欧州の貴族社会は何処も似たり寄ったりだった。むしろ見方を変えれば愛人が主流であった国も多いのでイタリア人から見ればそちらの方がけしからん事だったかも知れない。ロシアのエリザベータ女帝もエカテリーナ二世も男性遍歴の激しさで有名であったしイギリスのチャールズ一世は稀代の女たらしであった。何しろイギリスはヘンリー八世の女性問題で口

「マ」カトリック教会と袂を分かった国でもある。処女王と言われるその冷徹さと鋭利な頭脳で知られたエリザベス一世も幾人が愛人がいた事が確認されている。

この点において特に有名なのがフランスであろう。どうもこの国の国王は代々女好きの国王ばかり出てくる。フランソワ一世、アンリ三世、アンリ四世と次から次にとカサノバの向こうを張る色事師が登場する。アンリ三世に至っては自分の身辺を着飾った美男の剣客達で固めていたのだからその道の人物まで揃えていた。それでも彼等はルイ十四世、ルイ十五世の二人程ではなかったが。この二人によってどれだけの花が折られてしまった事であろうか。フランスの夜が長いのも考えものである。

こういった状況だからおしどり夫婦として有名だったマリア「カロリーネの両親マリア」テレジアとフランツ「シュテファン」フォン「ロートリンゲン」は特筆に値する。ただし中々の美男子であり人柄も良かった神聖ローマ帝国皇帝の夫には言い寄って来る女性が結構いた様である。浮気の虫が起きる前にいつも夫に気付かれぬように妨げていたので何事も無かったが。

マリア「テレジア」は男女関係、女性の誇りについてとかく口やかましい人物であり夫婦や親子の愛が何よりも好きだった。これは女性を蔑視してやまない宿敵プロイセン王への対抗意識も含まれていた。もっともこのプロイセン王は生涯独身でありサン「スーシー」で哲学書を読んだりコーヒーを飲みながら青年士官達と談笑するのを無上の喜びとするこの時代屈指の変人であつたが。

勿論アツタヴァンティ侯爵にも情友はいる。彼なりに楽しんでいる。妻に情友がいるからと騒ぐつもりは毛頭無い。むしろ情友が自分も知っている気心の知れた人物だったので安心してしている程である。

第二幕その八

トリヴェルディ子爵が来た。黒の髪に緑の瞳を持つスラリとした美男子である。侯爵から例の扇を渡された。侯爵とトスカの双方からこの扇が夫人のものかどうか問われた。

暫くまじまじと見ていたが侯爵に返し言った。それはトスカが危惧していたものだった。

「そうです、これは侯爵夫人の扇に間違いありません」

トスカはその言葉にワナワナと震えだした。顔が紅潮しその黒い瞳に嫉妬の炎が宿る。

「マリオ……許せない！」

口から燃える様な言葉が吐き出る。

「きつとあそこね、見てらっしゃい！」

ここでトスカは致命的なミスを犯してしまった。それに彼女は気付いていない。だがこの言葉が彼女を地獄へ引き摺り落とすことになってしまった。

「あそことは！？」

計算通りだった。スカルピアは次の一手を打った。

「貴方が知らせに行かれるとよくありませんからお教えするわけにはいきません。私が飛んで行って二人を捕まえます」

そう、二人だ。その二人へ向けて今鷹が放たれた。侯爵が扇を受け取るや否や王妃とパイジェツ口に挨拶を済ませ宮殿から姿を消した。

「これでよし、と」

スカルピアは笑った。

「御一緒にして下さいませんか」

そう言ってアッタヴァンティ侯爵を引き寄せた。王妃に挨拶を済ませると侯爵を連れて下に待たせておいた部下達と合流し二人残し馬車でトスカの後を追った。宮殿を出て暫くして一台の馬車と擦れ

違つたが気に留めなかつた。

トスカとスカルピアが退場した後も大広間では宴が続けられていた。王妃も他の者達も皆美味しい酒と料理、そして勝利に心地良く酔っている。そこへアルトゥーロ・カヴァラドゥツシが駆け込んで来た。

「どうしたのですか、將軍。何か忘れ物でも？」

「いえ、火急の早馬が来ましたのでお伝えに参つたのです」

美酒に酔う王妃にそう言うと言つて固い表情で懷から一通の書を取り出し王妃に手渡した。

手に取り読む。その書を読むうちにそれまで酒と喜びで紅かつた王妃の顔は見る見るうちに蒼白になった。そして最後には氣を失い倒れ込んだ。

それを伯爵が支える。周りの者は皆王妃を氣遣い駆け寄る。

書が落ちていた。一人が王妃が手にしていた書を拾い読んだ。そして思わず叫んだ。

「……………負けた！」

周りの者も書を覗き込む。本当だつた。

それまで賑やかだつた広間は大騒ぎとなつた。敗戦の話聞きそのショックで叫ぶ者もいれば悲鳴をあげる者もいる。だが外ではまだその事を知らないローマの市民達が万歳を叫んでいる。

伯爵はその喧騒の中で一人冷静だつた。近侍の者呼び王妃を介抱するよう言つと場を静めだした。伯爵の手により人々は恐慌状態から立ち直り落ち着きを取り戻していた。

広間は伯爵のてにより静かになった。皆騒いでいたが何とか落ち着いてきた。

この時伯爵の他にもう一人冷静な人物がいた。人々の中に入つて解かりづらかつたが一人だけいたのだ。紅衣を着たあの男だ。

トスカに十字架を渡してから広間の端の方に控えていたがトスカの行動を一部始終見ていたのだ。スカルピアの行動も。

「予定通りだな」

一言呟いた。動いた。猫の様に素早くしなやかな動きだ。

「それでは次の行動に移るとしよう」

まるで影の様に誰にも気付かれない事無く広間を後にした。この人物が何時退場したのかこの広間にいた誰も知らなかった。

トス力は恋人の下へ馬車を急がせる。そしてその後をスカルピアが追う。陰惨な劇が幕を開けようとしていた。

第三幕その一

第三幕 カヴァラドゥツシの別邸

ロムルスとレムスの兄弟により建てられローマ帝国の帝都となりローマ・カトリック教会の聖都となったローマは古の時代よりあり長い歴史を歩んできた。多くの栄枯盛衰、興亡を見てきた。それと同じ数だけ戦乱や陰謀の舞台ともなってきた。

ローマ劫だけではない。ローマの時代にはケルト人やカルタゴが攻め寄せて来た。スラとマリウスが権勢を争いユリウス・カエサルも流血の中に倒れた。カリギュラが血の帳で覆った時代もあった。ゲルマン人とビザンツ帝国の争奪の場ともなった。この時ビザンツの将兵達は喜び勇んでローマの市民達を殺戮して回った。やがて東西教会の分裂を経てフランク王国や神聖ローマ帝国の後ろ楯を得るようになるがそうになると今度は聖俗入り乱れての権力争いの場となったのである。

メディチ家やボルジア家といった教皇を輩出した権門だけでなくハプスブルグ家やヴァロワ家といったドイツやフランスの帝室、王室まで介入してきた。毒や刺客を使つての暗殺なぞ日常茶飯事であった。とりわけその中でもカントレラという秘薬を使い政敵を次々と抹殺していったルネサンス期の教皇アレックスサンドロ六世とその長子ヴァレンティーノ公チエーザレ・ボルジアの親子は有名であろう。同じ時代の生きたマキャベリが自らの著において理想の君主とさえ讃えたチエーザレ・ボルジアは美男子としても有名であったがその美貌はメフィストフェレスの美貌であった。悪魔的に切れる頭脳でもってローマ中に監視を置き次々に政敵や自らの障害になる存在を消していった。その中には自身の弟ガンディア公ホアンも含まれていた。

この時カヴァラドゥツシ家は教皇父子にとって目の上のタンコブであったナポリのスフォルツァ家と縁戚関係にあり彼等にとってあ

まり面白い存在ではなかった。宴の場で教皇やチエーザレに遠回しにボルジアに着くかスフォルツアに着くか問われたこともあった。夕食を盗み食いした猫が急に苦しみだして死んだ事もあった。夜道に上から石が落ちて来た事もあった。教皇もチエーザレもカヴァラドゥツシ家を除くつもりだったのだ。

だがある日カヴァラドゥツシ家の者はローマから消えた。教皇はローマの隅から隅まで捜したが見つからなかった。やがて教皇もチエーザレも世を去りカヴァラドゥツシ家を脅かそうとする者達はいなくなった。

二人がいなくなったのを見計らってカヴァラドゥツシ家の者達は再びローマに姿を現わした。ローマの者達はあのチエーザレの目を盗んで一体何処に隠れていたのか不思議がった。家の者は軽く微笑んで答えをはぐらかしてばかりで結局誰にも解からなかった。そのうちナポリにでもいたのだろうという事になり話は収まった。だが真相はどうだったか。

実はローマにいたのである。カヴァラドゥツシ家は本邸の他にカラカラ浴場とシピオン廊の間に別邸を持っていたが実はもう一つ別邸を持っていたのだ。

ローマの外れにあるこの邸は泉と緑に深く覆われ外見は極めて質素である為教皇父子も全く知らなかったのだ。この邸は古くよりカヴァラドゥツシ家の秘密の隠れ家であり、それを知る者は家の者とごく限られた代々の使用人だけであった。従ってスカルピアも本邸と別邸は知っていてもこのもう一つの別邸までは知らなかったのである。

その燭台で照らされた一室にカヴァラドゥツシとアンジェロツティはいた。椅子に座り話をしている。

「ここならもう大丈夫だよ」

落ち着いた表情で笑みを浮かべて友人に言った。

「済まないね、何もかも」

アンジェロツティが申し訳無さそうに言うのをカヴァラドゥツシ

は手を振って打ち消した。

「何言ってるんだよ、小さい頃からの友達じゃないか、固い事は言いつこ無しだ」

「有り難う、けどよくこんな所に別邸を持っていたね」

「何、御先祖のちよつとした遺産さ」

「遺産？」

「そうなんだ。ここは元々僕よりかなり前の祖先ルイギ「カヴァラドウツシ」の建てた別邸だったんだ。避難用のね」

「避難用？」

「そう。このローマはかつて三度世界を支配しただろう」

「ああ、法とキリストと……力によって」

「そう。そしてその三つにおいて世界から恨みを買った」

「だから実に色々とやって来てくれたな。その度に街を荒らしてくれた」

「そういう時の為に古い家だと秘密の隠れ家がある」

「その通り」

アンジェロツティはニツと笑った。何故なら彼もその隠れ家を使ってエマ「ハミルトン」から隠れていたのだから。

「我が家ではこの家がそうなのさ。僕とこの家にいる二人の従僕、兄さん、そしてフローリア以外誰も知らない秘密の場所さ」

「だから途中で馬車から降りてわざわざ遠回りしてここまで来たんだね」

「そう、用心してね」

「などスカルピアの奴は目聡くて執念深いよ。ひよつとするとここまで来るかも知れないよ」

「大丈夫、もう一つ逃げ道がある」

アンジェロツティの危惧にカヴァラドウツシは答えた。

「それは？」

アンジェロツティは思わず身を乗り出した。

第三幕その二

「この家の庭に糸杉に囲まれた帝政ローマの頃の古い井戸がある。今さっき言った祖先が偶然見つけたものだけだね。実はその井戸には横穴があるんだ」

「横穴ねえ」

「そこへは綱を掛けて降りて行くん。入口はやつと這って身体が入られる位の広さだけど先に行く程広くなっていくんだ」

「成程。そしてそれからどうなっているんだい？」

「一人立てる程の広さになる。そして外に続いているんだ」

「脱出路、という訳だね」

「ああ。おそらくかつてこの家が建てられるより前に帝政時代の貴族の家があつたのだろう。その貴族が非常時の為に密かに造つておいたのだろう。この家の従僕の一人から聞いた事なんだけれど当のルイギも彼を侮辱したメデイチ家の一人を決闘で殺してしまった時にこの家に逃げ込んで井戸から外へ脱出して難を逃れたらしい。君もいざという時はこの井戸があるから安心してくれ」

「重ね重ね有り難う。しかしマリオ、いいのかい？」

「何が？」

「脱獄した僕を匿っている事だよ。おそらく僕には多額の懸賞が懸けられているだろうし匿っている者は縛り首だろう。しかも君は前からスカルピアの奴にマークされている。下手をすれば命が無いんだよ」

「アンジェロッティ、それはお互い言いつこなしたよ」

カヴァラドゥッシはニコリと笑った。

「君は幼い頃から僕が困っている時はいつも助けてくれた。その恩を忘れた事はない。今その恩を君に返す時が来た。それだけだ。それにカヴァラドゥッシ家の家訓にこうあるんだ。『水に溺れている者がいたならば命を賭して助けよ』とね。例えば絞首台に架けられて

もそれまでの事」

「マリオ……」

その時正面の扉が開く音がした。誰かが家に駆け込んで来た。

「！！」

二人は席を立った。アンジェロツティは窓から庭へ逃げようとする。

「待つてくれ、追っ手ではない」

足音は一人だったし心なしか軽めだ。それに“マリオ、マリオ”とアンジェロツティの姓ではなくカヴァラドウツシの名を呼んでいる。そしてその声はかん高い女性の声だ。

「フローリアだよ。今夜別邸に来るって言ってたんだ」

アンジェロツティは安堵の息を漏らした。そこへトスカが部屋の扉を開け飛ばして入って来た。恐ろしい剣幕である。

「やあ、早かったね」

カヴァラドウツシは微笑んでトスカを迎えた。

「そうよ。わざわざ飛んで来たのよ。浮気者を捕まえにね」

きつとカヴァラドウツシを睨み付ける。

「浮気者って！？」

じつは全く身に覚えの無いカヴァラドウツシはトスカのその言葉にきょとんとした。

「まあ白々しい、私の目を盗んであの女と会っていたくせに！」

「あの女って？」

トスカがだれの事を言っていて何故これ程怒っているのか理解出来ない。身に覚えの無い事であるしそれに今はもっと重要な事を考え話していたところなのだから。

「まだ白を切るつもりなの、これを見てもまだ言える！？」

と手にしていた扇を見せつける。

「扇？これが一体？」

狐につままれた様な顔になった。ふと扇に彫られている紋章が目に入った。

「アツタヴァンティ侯爵家の紋章か。とするとこれはマルケサのものか」

「そうよ、貴方の浮気相手のね」

「浮気相手!？」

カヴァラドゥッシはようやく事態が飲み込めてきた。

「分かったよ。まあ少し静かにしてくれ。今から君に説明するよ」
「何を!？」

「ちよつと落ち着いて。それじゃあ気が狂っているみたいだよ」
トス力を宥めようとするが当のトス力是一向に収まらない。

「そうよ、私は狂ってるわ。狂っているからこそ卑劣で嘘つきで浮気者で恥知らずの遊び人を愛しているのよ。私からあの女へ、あの女から私へと遊び歩いてその残り香を私の下へ運んで来る図々しい蜜蜂をね。その蜜蜂を心で、身体で、そして血潮で愛している私は狂った花なのよ!」

「・・・・・・・・・・言いたい事はそれだけかい？」

「まあ、憎たらしい、開き直るつもり!？」

その時何か踏んだ。見ると女物の服だった。

第三幕その三

「こんな物まであるのに！」

服を手に取り扇と一緒に見せつける。

「服？じゃあ話が早い。確かにそれもマルケサのものだよ」

「やつぱり！」

トス力は更に激昂する。だがカヴァラドゥッシは相変わらず冷静である。

「話は最後まで聞いて。これを着ていたのは彼女じゃない」

「えっ！？」

今度はトス力がキョトンとした。

「これを着ていたのは彼女のお兄さんだよ。そこにいるアンジェロッティだ」

「アンジェロッティって………。夕刻にサン＝タンジェロ城を脱獄されたというアンジェロッティ侯爵！？」

トス力はこの時ようやく自分と恋人の他に部屋にいる人物に気がついた。トス力が自分の方に顔を向けるとアンジェロッティは一礼した。

「じゃあ………」

次第に落ち着きを取り戻してきた。そして事態を把握してきた。

「そうだよ。サン＝タンドリア＝デッラ＝ヴァッレ教会に逃げ込んでいた時に会ってね。今この邸に匿っているのさ」

「まあ、そうだったの。そうだったら早く言ってくれば良かったのに」

トス力の顔が急に晴れやかになった。

「君を巻き込むまいと思ったからね。後で話すつもりだったけれど」

「御免なさい、マリオ。貴方を疑った私を許して」

そう言って恋人の胸に顔を埋めた。

「マリオ、貴方は素晴らしい人よ。自分の命を賭けて御友達を助け

るつもりなのね。そんな人を疑うなんて……。嫉妬深い私を許して。私は貴方の愛が無くては生きられないの」

「フローリア……」

カヴァラドゥッシもトスカを抱き締めた。

「アンジェロッティは今夜ここにいてもらい朝にはローマを脱出してもらおう。僕もヴェネツィアに発つまでここに潜んでいるつもりだ。フローリア、君も怪しまれないように自分の家に帰るんだ。そしてあの街で落ち合おう」

「そんな、暫く会えないの!？」

「仕方無いさ。僕も暫くあの絵をほつたらかしにするのは忍びないが君まで危険に晒すわけにはいかない」

「けれど貴方が捕まらないか……心配だわ」

「僕の事は心配無用さ。ここは誰にも絶対に見つからない。それにしても……」

アンジェロッティが着ていた服と共にトスカの手にあつた扇を取った。

「この扇が君を嫉妬に狂わせたのか。罪な扇だな」

右の親指と人差し指で持ち苦笑しながら見ている。

「御免なさい……」

トスカも反省している。完全にしょげていた。

「いいよ、済んだ事だ。多分教会に落ちていたんだろうけどどうしてこの扇を手に入れたんだい？僕が教会を出た後またあそこへ行ったの？」

「いえ、頂いたのよ」

「誰に？マルケサは今ローマにいないと聞いたし侯爵でも情友のトリヴェルディ子爵でもないみたいだし」

「スカルピア男爵よ。何か思わせぶりな口調だったけれど」

「スカルピア!？」

カヴァラドゥッシとアンジェロッティに雷が走った。その時外から多くの声がした。

「御主人様大変です。大勢の人が戸を叩いています」

従僕の一人が駆け込んできた。

「やはり！」

カヴァラドゥッシは外の者達が何なのか瞬時に理解した。そしてすぐに動いた。

「チエッコ、悪いが時間を稼いでくれ」

チエッコと呼ばれた従僕はすぐに部屋を出て行った。

次はアンジェロッティの方へ向き直った。すぐに友へ言った。

「追っ手だ、もう時間が無い。すぐに井戸を使って逃げてくれ」

「判った」

領きすぐに服を手に取り窓へ向かった。

「元気でな」

振り返らずにカヴァラドゥッシが言った。

「ああ、また会おう」

そう言うときアンジェロッティは窓から消えた。風が入って来た。風に吹かれた窓は大きく開かれたがその反動で音を立てて閉じられた。

「そんな、私のせいで……」

トスカは顔を真っ青にしオロオロとしている。窓と扇をきよろきよろと見、手も身体もガタガタと震えている。

「心配する必要は無いよ、君は悪くない」

「けど……」

恋人の暖かい言葉にもトスカは震えている。

扉が開かれる音がした。廊下をドスドスと大勢の者が大股で歩く音がする。そしてその音は次第に扉へと近付いて来る。

扉が開かれた。警官達が入って来た。蝋燭の炎に照らされた黒い制服を見ただけでトスカは気を失いそうになった。

警官達はトスカとカヴァラドゥッシを取り囲む様に部屋中に散った。トスカはカヴァラドゥッシの左腕にしがみつき必死に意識を保とうとしている。また廊下を歩く音が近付いて来た。そして岩山の

様な男が部屋に入ってきた。

スカルピアだ。アッタヴァンティ侯爵を伴っている。後にスポットとコロメッティ、そしてスキャルオーネを引き連れている。蠟燭の炎がその顔を下から照らし出している。

「こんな夜中に何の用だ？」

カヴァラドゥッシがスカルピアに問うた。冷静かつ毅然とした態度を崩さない。

第三幕その四

「失礼、実は子爵にお聞きしたい事がある方がおられまして」

「誰だい？」

「こちらの方です」

そう言つて侯爵を手で指し示した。

「あ、これは侯爵。この様なところにまでおいで下さるとは。一体どの様なご用件でしょうか？」

カヴァラドゥッシは尋ねた。それに対し侯爵はオドオドとしていた。するとスカルピアが出て来た。

「実は侯爵がこちらに奥方がおられるのではないかと仰いましたので」

と言つた。

「そして訪ねて来られたのですか。残念ですがご夫人はこちらにはおられません。疑われるのならここにいるフローリアに聞いて下さい。彼女もそれを確かめにこの家へ来たのですから」

カヴァラドゥッシは言つた。トスカも同調した。

「はい、間違いありません」

「でしよう？先程から申し上げているように私はカヴァラドゥッシ子爵を若い頃より存じ上げているのです。この方はそんな事をする筈が無いと申し上げているではないですか」

と侯爵も言つた。だがこれは計算のうちだった。スカルピアは次の手を打つた。

「ですが貴方が仕事をしておられる教会に侯爵夫人の扇が落ちていました。これは何故ですか」

と問うた。カヴァラドゥッシは応えた。

「あの方は何回か教会に来ておられました。その時に落としたのでしう。あの方が教会に來られていたという証拠は私が今あの教会で描いているマグダラのマリアの絵です。モデルに使わせて頂きま

した」

例え相手がスカルピアでも臆するところはない。

「そうでしょう、それで話の辻褄が合います」

と侯爵も相槌を打った。

「それに侯爵夫人がここにおいでになつていないという事は家捜しでも何でもしてお確かめになれば宜しいでしょう」

カヴァラドゥッシはしれつとして言った。あえて挑発の意も含んだ。それに相手も乗った。

スカルピアが目配せするとスポレッタとコロメッティが動いた。

数人の警官が後に続く。

家の所々を捜し回る音がする。それを聞きながら侯爵がオドオドとした様子でスカルピアに窺った。

「私はもう用が無いみたいですが。これで失礼させて頂きたいのですが」

その言葉にスカルピアは少し考えたがもう侯爵に用が無いのは事実だしこれ以上いられても邪魔にかなりそうにもなかった。

「ええ、侯爵はもうお帰りになつて下さつて結構です。奥様も御自宅へお帰りになつておいででしょうし。それに奥様がここへ御自身の兄をわざわざ連れて来るとは思えませんし」

とさりげなくアンジェロツティの事も入れた。これに対し侯爵は慌てた。

「妻の兄がここに？男爵、いくら何でもそれは冗談が過ぎますぞ」

いささか狼狽し過ぎている程だ。スカルピアはそれに対し口の両端だけで笑っている。

「ははは」

「彼とは出来る限り早く縁を切りたいと考えているのです。何かある度に身の周りを探られそうになるのはもう嫌ですから」

早口で言う。それに対しスカルピアは妙ににこやかに笑っている。「それではこの場は我々にお任せ下さい。スキャルオーネ」

名を呼ばれスキャルオーネが出て来た。

「侯爵を馬車でお送りするように」

スカルピアの言葉に返礼し侯爵を送り出していった。足音が次第に遠のいてゆく。

二人と入れ替わりにスポレッタとコロメッティが入って来た。スカルピアの前で敬礼する。

「何か見つかったか？」

スカルピアはまずそう聞いた。

「いえ、何も」

「家の中にもか」

「はい」

「いないか」

「はい、誰も」

「何も無いか」

「はい、何も」

それを見ながらカヴァラドゥッシは心の中で会心の笑みを浮かべていた。全ては彼の思惑通りであった。

「そうか」

スカルピアの眼が光った。

「子爵」

カヴァラドゥッシの方へ向き直った。顔に何やらドス黒い陰が挿した。

「少しお聞きしたい事があります」

「何です？ 証拠なら何も無かったではないですか」

「今のところはね。それにしても貴方の服といい靴といいお髭といい実に素晴らしいですな。良く似合ってらっしゃる」

カヴァラドゥッシのフランス国旗に見立てた服と靴、そして顎鬚を皮肉る。

「それはどうも。服や靴はともかく髭を誉めてくれる方はあまりおりませんので光栄です」

カヴァラドゥッシは返した。この程度の皮肉は余裕をもって返せ

る。

「確か今アルプスを越えてマレンゴで死んだ蛙達もそんな格好だった」

「ほお」

「志ある者ならおりますが」

「失礼、言葉が過ぎました。では子爵、改めてお聞きます。今日囚人が一人サン＝タンジェロから脱獄したと貴方は幼い頃からの知り合いでしたな」

「そうでしたっけ。何しろ私の友人は実に多くて誰かまでは。ただ物真似師の友人はおりません。志ある者ならおりますが」

「失礼、言葉が過ぎました。では子爵、改めてお聞きます。今日囚人が一人サン＝タンジェロ城から脱獄したのは御存知ですね」

「そうだったんですか？知りませんでした」

「そしてその囚人を貴方が匿った」

「何処に？」

「この別邸に」

「で、家捜しして何も出なかったと」

「巧く隠れていますな」

「男爵、人を疑うのは感心しませんな」

「仕事なので。やっかいな鼠共を捕らえるには何事も注意深くなくては」

スキャルオーネが帰って来た。スカルピアはそのまま控えさせた。

第三幕その五

「その注意深さからお聞きした。アンジェロッティは何処ですか？」

「知りません」

「この邸にいる筈です」

「知りません」

スカルピアは一息置いた。蠟燭の炎が揺れた。それに合わせてスカルピアの影も生物の様にユラツと動いた。

「子爵、よくお考えになって下さい。その様に強情を張られても良い事は何もありませんぞ。すぐに本当の事を仰れば苦痛から避けられるのです。忠告致しましたぞ」

「どうも」

「ではもう一度お聞きします。アンジェロッティは何処ですか？」

「知りません」

スカルピアの全身の気が変わった。何かが剥き出しになった。それを見て彼の部下達も思わず身震いした。

「これが最後です。応えなさい、アンジェロッティは何処ですか？」

「知りません」

「ああ、縛り首確實だな」

三人は呟いた。今まで上司にそういうふうな態度を取った共和主義者達の末路を散々見てきたからこそそう言えたのだ。

「そうですか。では致し方ありませんな」

警官の一人に目配せする。その警官が退室した。暫くして黒く長い服の査問官が警官に案内され入って来た。

「マリオ・カヴァラドゥッシ子爵、査問官が貴方を証人として望んでおります。貴方とその御婦人に別々に尋問させて頂く事にしましょう」

スカルピアが右手の指を鳴らす。警官達が動き出した。

カヴァラドゥッシはトスカの耳に顔を近付け囁いた。

（ここでの事は何も言わなくてくれ。さもないとアンジェロッティも僕も死ぬ事になる）

トスカはちいさくええ、と頷いた。

カヴァラドゥッシの両腕を警官達が掴む。連行されながら彼はスカルピアに顔を向けた。

「私を痛めつけても何も出ないぞ。それに彼女は何も知らないぞ」

スカルピアは聞いていない。その代わり査問官に何やら耳打ちしている。

「まずは普通のやり方だな。後は………」

チラリとトスカの方を見た。

「私のやり方でいくでしょう」

査問官は頷き部屋を後にする。カヴァラドゥッシと警官達が続く。コロメッティ、スキャルオーネも同行する。スポレッタだけが残るが部屋の置くの扉の傍に引き下がった。

部屋の真ん中にトスカだけが残された。必死に震えを抑え冷静さを保とうとしている。

「さて、トスカさん」

この場におよそ似つかわぬ親しげな猫撫で声でスカルピアは騙り掛けてきた。

「二人だけで、ごく親しい友人としてお話ししましょう。まあそんな苦しそうな顔なぞなさらずに」

「苦しんでなんかいません」

トスカは無理に強がって言った。

「そうですか。まあお座り下さい。ゆっくりとお話ししましょう」

「はい」

スカルピアに勧められ席に着いた。スカルピアもそれに続く。

「ではお話ししましょう。扇の件についてですが」

「私の焼き餅でした。馬鹿げた嫉妬に過ぎませんでした」

スカルピアは探る様に目を動かした。トスカは心の中を覗かれているのではないかと感じた。

「そうでしたか。ではこの邸に侯爵夫人はおられなかったのですね？」

「はい。あの一人だけでした」

背中を冷たい汗が伝った。その悪寒に思わず身震いした。

「一人？確かですね」

「嫉妬深い者は例え髪の毛一本であろうとも見逃しません。絶対に一人でした」

トスカが激昂してきた。スカルピアはわざと背を引き姿勢を正し自分を大きく見せてきた。

「本当に？」

「間違いありません」

背を屈めてきた。顔をトスカに近付ける。

「何か妙に興奮されてますね。まるで自分が誰かを裏切ってしまうのではないかと怖れている様だ」

「そんな事はありません！アッタヴァンティ侯爵夫人は確かにこの邸にはおられませんでした！」

キツとスカルピアを見激昂しつつ言った。スカルピアはそれに対し両手で押し止める様に制した。

第三幕その六

「まあ落ち着いて下さい。アッタヴァンティ侯爵夫人がここにおられなかったという事実は確かに解かりました」

その言葉にトス力はホツとした。だがスカルピアは口の端に邪な笑いを作って言った。

「確かに侯爵夫人はここにはおられなかった。だが彼女の兄はどうか？」

その言葉にトス力は戦慄を憶えた。驚きが顔に浮き出ようとするが慌てて無表情の仮面を被りそれを覆い隠した。

「よく考えれば彼女も彼女の兄も子爵とは幼なじみ。しかも侯爵は子爵と同じジャコビーニ、充分考えられる事ではある」

「侯爵夫人もそのお兄様もこの邸にはおられませんでした」

トス力は強く頭を振って言った。だがそれに対しスカルピアが返したのは冷笑であつた。

「ほほう、果たして最後までそう言い切れますかな？」

「え！？」

「スキャルオーネ」

「はっ」

スキャルオーネが部屋に入つて来た。

「どうだ、子爵は何か仰つたか？」

「いえ、一言も」

「そうか」

笑つた。岩石の様な顔に悪魔の笑みが浮かび上がった。

「伝えよ。もつとやれ、とな」

「分かりました」

あえてトス力に聞こえる様にはつきりと、そして大きな声で言った。スキャルオーネは敬礼し部屋を後にした。

「無駄です、あの人は何も知りません」

「そうですか、残念ですな」

「どうしたら御理解して頂けるのでしょうか？その為には嘘をつかねばならないのでしょうか？」

萎れるトス力。だがスカルピアはそのトス力を見て更に笑った。

「その必要はありません。ですがもし貴女が本当の事を仰れば苦しい時を短くする事が出来ます」

その言葉にトス力はハツとした。

「苦しい時！？何がですか？あの部屋で一体何が……………」

「

「法は守らなければなりません」

わざと素っ気無く言った。

「それは……………」

トス力の問いにスカルピアは先程の笑みと共に答えた。

「何、大した事ではありません。子爵は手と足を縛られ、こめかみには鉤の付いた輪が嵌められ椅子に座られているだけです。もっともこちらの質問にお答えして頂けないと輪が締められそこから血が噴き出るのですがね」

「そんな……………」

トス力の顔から血の気が完全に引いた。スカルピアはそれを見て心の中で笑った。

「だが貴女なら彼を救う事が出来ます」

「……………」

トス力の目の前が急に暗くなった。部屋を出る時の恋人の言葉が脳裏に響く。だが今の彼の姿を想像しただけで胸が潰れそうになる。

「さあ、どうします？全ては貴女次第ですよ」

何か聴こえたように感じた。それは恋人の呻き声だった。

「わ……………わ……………」

出ない。声が出ない。声にしたくとも声にならないのだ。

「わかり……………まし……………た……………」

テーブルの上に崩れ落ちた。それを見届けスカルピアは席を立つ

た。

「コロメツティ」

名を呼ばれコロメツティが入って来た。

「解いてやれ」

ちらりと崩れ落ちているトスカを見下ろしつつスカルピアは言った。コロメツティは敬礼しつつ問うた。

「全てですか？」

「そうだ」

「解かりました」

再び敬礼しコロメツティは退室した。スカルピアはトスカに歩み寄り覆い被さる様に彼女に顔を近付け問うた。

「あの人に逢わせて・・・・・・・・」

「駄目だ」

「そんな・・・・・・・・」

「真実を」

トスカから離れ再び問う。トスカは身体を起こした。スカルピアは睥睨する様にトスカを見下ろしている。扉が目に入った。立ち上がり駆け寄ろうとするがその前にスポレッタが立ちはだかった。

力無く崩れ落ちた。だが扉に顔を付ける事は出来た。

「マリオ」

恋人の名を呼んだ。暫くして声が返ってきた。

「フローリアか」

恋人の声を確認出来少し安堵した。

「大丈夫、ねえマリオ、大丈夫？」

扉越しに必死に声を掛ける。

「僕は大丈夫だ。落ち着くんだ、いいね」

「ええ、けど・・・・・・・・」

「いいね」

「はい・・・・・・・・」

トスカはそう言つて扉にもたれかかった。スカルピアはその後ろ

へ音も無く近付いて来た。

「ふむ、まだ言わないか。スキャルオーネ」
扉の向こう側へ話し掛けた。

第三幕その七

「はい」

スキャルオーネの声がした。

「また始めろ」

「解かりました」

すぐに声がした様に感じた。その声は恋人の呻き声だった。

その声が耳からトスカの心へ入って来た。

その声がトスカの心の最も弱い部分を強く幾重にも締め付ける。

胸が苦しくなりその顔は雪の様に白くなり汗が髪と顔を濡らす。

「駄目、止めて下さい」

耳を塞ぎ目を瞑った。

「では話してくださいかな」

表情を何一つ変えずにトスカに言った。トスカの心は潰れんばかりになった。

「いいえ……」

もう少しで言いそうになった。だがすんでのところで止まった。

「鬼よ……鬼だわ、貴方は。あの人も私も苦しめ抜いて殺すつもりね」

絶え絶えに喉から搾り出す様にして言った。それに対しスカルピアは極めて、そう氷の如き冷酷さでトスカに言った。

「それで？ 私は貴女がそうやって口を閉じられている方がより一層隣の部屋におられる方を苦しめてしまうのではないかと思いますけどね」

「そうやって心の中で笑うのね……。地獄の炎の中の様な怖ろしい責め苦を与えそれに悶え苦しむ様を見て笑うのね……」

「。鬼よ、本当の鬼よ！！」

「……」

悲嘆と苦悶の入り混じった顔で壁に崩れ落ちるトスカをスカルピ

アは表情を変える事無く見ていた。そして密かに考えていた。

（舞台でのトス力はこれ程まで悲劇的ではなかったな）

スカルピアの嗜虐的な欲望に更に火が点いてしまった。トス力から一旦目を離し顔を上げた。

「スポレッタ」

一人残っていたスポレッタに声を懸けた。スポレッタはそれに対しほぼ反射的に敬礼をした。

「扉を開ける」

スポレッタはその言葉に一瞬戸惑ったが上司の強い口調と眼光に怯み扉に手を掛けた。

「そうだ。悲鳴がよく聞こえてくるようにな。よく、な」

スポレッタは扉を完全に開けた。そしてトス力に立ち塞がる様にその前に立った。顔をトス力からそむけながら。

スカルピアの思惑通り隣の部屋からカヴァラドゥツシの呻き声が聞こえてくる。くぐもり地の底から呻く様である。

「負けるか」

だがカヴァラドゥツシは屈してはいなかった。もし屈すれば自分の命や誇りだけではない、友や恋人の命をも失ってしまう事になるからだ。

「強くしろ！」

スカルピアは言った。すると隣の部屋から聞こえてくるカヴァラドゥツシの呻き声が更に強くなった。

「負けてたまるか」

それでもカヴァラドゥツシは負けない。どうしても負けるわけにはいかなかった。このまま責め続けてもカヴァラドゥツシは死ぬまで口を割らなかつただろう。だがトス力は違っていた。

「話さない」

トス力に問うた。

「何をです？」

トス力は顔を上げた。

「早く」

「何をですの？私は何も知りません。それなのに何を言えと仰るのです！？」

トスカは必死に否定しようとする。だがそれをスカルピアは次の言葉で打ち消した。

「流石に名の知れた女優だけの事はある。愁嘆場もお上手だ。しかし先程貴女も聞かれた筈です。子爵の『まだ大丈夫だ』という言葉。そしてそれがどういう意味かも」

トスカの顔が凍りついた。それを確認してスカルピアは続けた。

「これはアンジェロツティ候の居場所が何処か知っておられるという事の証だ。そしてそれを知っているが何があるとも言わないという事だ。子爵だけでなく貴女も」

完璧であつた。後は追い詰めていくだけであつた。

「さあ言いなさい。何処に隠れているのです？」

「あ、ああ・・・・・・・・・・」

「ぐっ・・・・・・・・・・」

その時部屋から聞こえていたカヴァラドゥツシの声が止まった。気を失ってしまったのだ。

「起こせ」

すぐにスカルピアは言った。そしてトスカに顔を向けた。

「貴女が話されれば貴女も貴女の恋人もすぐに自由になれるのです。さあ早く話しなさい」

次の一手を打った。トスカの心が動いた。否、動いてしまった。

「あの人に会わせて。全てはその後で・・・・・・・・・・」

黒い瞳が大きく見開かれたその顔は今にも割れんばかりであつた。ハアハアと肩で息をしている。

「コロメツティ、どうだ？」

スカルピアはあえてそれを無視した。何も無かつたかのように隣の部屋の者達に問う。

「息を吹き返されました」

コロメツティの声がした。カヴァラドウツシの意識が戻った事を
知りトス力は少し胸を撫で下ろした。

だがもう限界であった。隣の部屋へ行こうと立ち上がった。ス力
ルピアはそれを待っていた。

スポレッタに目配せをする。スポレッタは横に身を退けた。

廊下を駆けトス力は隣の部屋に入った。部屋の中を見た時トス力
は危うく気を失いそうになった。

部屋の中には数本の燭台に照らされ十人近い男達がいた。

黒い制服の警官達が椅子を取り囲んでいた。スキャルオーネやコ
ロメツティもいる。

第三幕その八

椅子の正面には拷問係と記録官がいた。拷問係は暗灰色の服を、記録官は白い服を着ている。彼等の前のその椅子にカヴァラドゥッシは座らされていた。

椅子は肘掛け椅子だった。そこに両手と身体を括り付けられている。そして三つのきつ先が付いた鉄の爪が頭に

被せられている。きつ先は赤黒い血に濡れカヴァラドゥッシに向けられていた。一つは首に、一つは右のこめかみに、そして最後の一つは左のこめかみに――。その三つからカヴァラドゥッシは血を流している。

「マリオ！」

蒼白の顔でトスカは呼び掛けた。

「フローリア」

血を流し失神さえ経ていながらもカヴァラドゥッシの態度は毅然としていた。しっかりとした表情でトスカの方へ振り向いた。

「心配する必要は無いよ。例えば胸を弾丸で貫かれようが僕は死なないよ」

微笑さえ浮かべ恋人に言った。トスカを落ち着かせ心配を取り除く為だった。トスカの気の強さと気丈さを知っていたからこそだった。彼は知らなかった。彼女の気の強さも気丈さも上辺だけのものだという事を。そしてその二つの鎧で護られた彼女の心がどれだけ脆くて弱いものであるかを。

恋人の言葉でトスカは何とか心を持ち直した。だが恋人の姿を見てしまったのは命取りだった。スカルピアの言葉が心の隅々まで打ち続ける。これ以上自分の愛する者が苦しむのを見たくも聞きたくもなかった。限界だった。カヴァラドゥッシが倒れるより先にトスカの心が割れて砕けてしまったのだ。

「マリオ、私、もう駄目……………」

血の気なぞ微塵も感じられない死人の様な顔でトス力は恋人に言った。

「フロリア……」

カヴァラドゥッシは言葉を失ってしまった。今まで自分が見た事のない、想像した事もないトス力が目の前にいたからだ。

「私、もう耐えられない……」

振り絞る様に言葉を出した。黒い瞳から涙が零れ落ちる。

「何を言っているんだ、君が何を知っているというんだ」

幼な子の様に泣きつつ言うトス力に驚いているが必死に彼女を抑えようとする。この時彼は過ちを犯してしまった。トス力に対し『君が何を知っている』と言ってしまった。確実にトス力は何もかも知っている。そしてその何かも。

それまでトス力といった部屋で事の成り行きを見守っていたスカルピアが動いた。まずスポレッタを顎でしゃくった。

スポレッタが動いた。トス力の下へ走り彼女の腕を掴んだ。嫌がる彼女を恋人の前から引き剥がし元いた部屋へと連れて行った。

そこにはやはりスカルピアがいた。部屋めでトス力を入れると扉を閉めその前に立った。

トス力は震えていた。まるで血に飢えた獣の前に立たされた子供の様だった。

スカルピアは半歩踏み出した。それだけで総毛立つ様だった。王手詰み。

「井戸……庭の……井戸の中です……」

震える指で窓の向こうを指し示した。スカルピアはそれに対し頷いた。

「スポレッタ」

素早く敬礼し部屋を出る。扉を出る瞬間彼は指で十字を切ったがそれは誰にも見えなかった。

やがて責め苦から解放されたカヴァラドゥッシが二人の警官に連れられ入って来た。頭から血を流し足取りはふらついている。しか

し心はしかとしていた。

「何も言わなかっただろうね」

強い視線でトス力を見つめる。それに対しトス力は伏し目がちで言った。

「え、ええ………」

その声は弱い。それを見てカヴァラドゥッシは大体の事を察した。
「井戸だ、行け！」

あえて二人によく聞こえるように命令を出した。警官達が一斉に動く。

「フローリア………」

弱々しい。そこには怒りは無かった。哀しみだけがあった。

「御免なさい、私………」

それ以上は言えなかった。涙と嗚咽に埋もれてしまったからだ。

「いやいい、いいんだ」

責められなかった。この女は自分の為に、自分を苦しみから解き放つ為にしたのだ。そうまで自分を想ってくれる女をどうして責められようか。

（アンジェロツティ、生きていてくれ………）

今はもう願うしかなかった。友が逃げ延びてくれるのを願うばかりであった。

スポレッタが戻って来た。扉を閉めスカルピアに敬礼する。

「井戸はどうなっている？」

「はっ、途中に横穴があります。おそらくそこから逃亡したものと」

「そうか。スキャルオーネとコロメツティに伝えよ。ここにいる警官の四分の三を連れて逃亡者を追え、とな。場合によってはその場で殺しても構わん」

「解かりました」

スポレッタは退室した。扉が閉められるのを確かめるとスカルピアは二人へ視線を移した。

「さて、と。次は・・・」

その時一人の警官が駆け込んで来た。

「何事だ、騒々しい」

肩で息をしている。よく見ればファルネーゼ宮に残してきた警官の一人だ。

「長官、一大事です」

「何だ？王妃からの御命令か？」

それはそれで厄介である。またあの公爵夫人が有る事無い事王妃の耳にいれたのだろうか。

「いえ、マレンゴの事です」

「勝ったではないか」

少し安堵した。またぞろ無理難題を押し付けられるのではないかと内心気にかけたのだ。

「敗戦です」

「あの小男が、どうう」

「いえ、我が軍がです」

「何っ！？」

「やったぞ！」

その報せにカヴァラドゥッシは飛び上がった。余りの喜びに我を忘れている。

「勝ったぞ、勝利だ。自由の旗がこのローマに再び立てられる日が来たのだ」

「くっ・・・」

スカルピアは悔しさで顔をしかめた。それを見てカヴァラドゥッシは続けた。

「苦しみを受けたがその後にはこの様な喜びが訪れようとはな。これでアンジェロッティも助かる。長官、貴方も王妃に睨まれぬうちにシチリアへ帰るんだな」

「ぐくっ・・・」

顔を紅潮させるがすぐに気を収めた。そしてトスカに視線を一瞬

向けた後冷静な口調で言った。

「その続きは場所を変えて聞かせて頂きましょうか。絞首台でね」
指を鳴らす。警官が二人近寄りカヴァラドウツシの両腕を押さえようとする。カヴァラドウツシはそれを振り払い自分で歩いて行く。
「さあ貴女も」

呆然とするトス力を有無も言わさぬ態度で連れて行く。後には誰も残らなかった。

従僕達は何処へ行ってしまったのだろうか。邸には人の気配が全く無かった。静寂が時を支配しようとしていた。

窓が大きく開いた。ボタンと音がする。

風が吹いた。ゆらゆらと照っていた蠟燭の炎を消し去ってしまった。

数台の馬車が遠ざかる音がする。そして全ては暗闇の中に消えた。

裁きを下すべき方が席に着かれる時

隠されていた事柄は全て露となり

誰もがその報いを避けられぬ

第四幕その一

第四幕 サン・タンジエ口城

欧州は今まで様々な災厄に悩まされてきた。森に潜む野獣、絶え間なく襲い来る飢饉、戦乱、狂った宗教や思想を元にした弾圧と虐殺、これ等により欧州の歴史の裏には夥しい赤黒く荒んだ血が隠されている。その中の一つとして疫病がある。

帝政ローマ、いや古代ギリシアより欧州は様々な疫病に悩まされてきた。天然痘、コレラ、結核等多くの疫病が欧州全土を荒らし回った。新大陸よりもたらされたと言われている梅毒もそうであるし中には舞踏病という奇怪な病さえあった。

この様に様々な疫病に悩まされた欧州の民達であるがとりわけ彼等が忌み嫌い恐れる病がある。それは黒死病である。

欧州の衛生環境は長い間極めて劣悪な状況にあった。一生の間に数回しか風呂に入らず服も変えない。シーツも洗わず藁のベッドは虱が街を造り顔もそうそう洗わない。ゴミや糞尿は路の端に捨てる為街には異臭が漂う。そこを鼠達が餌を求め走り回る。その鼠こそが問題であった。

鼠を宿とするダニ達が菌を持つ。そのダニが人に移り菌を移すのだ。

まず身体の節々が痛みだし発熱や吐き気に悩まされる。そして身体中に斑点が出来、それが身体中を染め上げる。激しい熱と痛みに苦しめられた末にドス黒い血を吐き死に至る。この恐るべき病は幾度か欧州を襲い多くの人命を奪った。スラブに伝わるヴァンパイア伝説の下地となり誤まった偏見により旅人や異邦人、特にロマニやユダヤ人が襲われたり魔女のせいだとされ罪無きか弱い人々が陰惨で身の毛もよだつ拷問と火刑により命を落とすといった悲劇も起こった。黒死病は欧州を黒い死で覆った悪魔の病であったのだ。

ローマとて例外ではなかった。いや多くの人々が住むローマは街

も路も入り込み迷路の様になっていた。所々にスラムや汚物、身寄りの無い行き倒れの屍を捨てる場所等があった。下水も豊かな時代にはあったがそれでも多くの人々に割り当てられるものではなかった。黒死病が流行るのも必然だった。

従ってローマも幾度か黒死病に襲われた。その度に多くの者が死んだ。ドス黒く変色した屍で街に埋め尽くされた。

五九〇年の時もそうだった。多くの者がこの世のものとは思えぬ恐ろしい形相で死に生き残った者も迫り来る死に怯えるだけであつた。その時救いの主が降り立った。

かつてローマの皇帝ハドリアヌスが自身とその家族の為に建てた墓所があった。橋も架けられたその墓所はローマの歴史の生き証人でもあったのだ。

街の灯も全て消え果て全ての者が死に怯える古都の夜に眩い白の光を身に纏いその者は天界より舞い降りた。その者の名はミカエル神の下に集う七天使の一人にして力と炎を司る大天使である。

彼はローマに降り立つとすぐに剣を抜いた。そしてその剣で黒死病を以ってローマを死と恐怖で支配せんとする悪霊を倒した。それを讃え時の教皇グレゴリウスがこの墓の上に教会を建てさせたのである。

それからは教会としてこの墓所は知られるようになった。だがローマ教会の勢力が伸張すると共にこの教会も変質していった。

十五世紀になると教皇ニコラス五世が教会の上に煉瓦でもって城壁と塔を構え、城塞とした。ついで前述のアレッサンドロ六世が八角形の堅牢な要塞に仕上げた。先に述べた『ローマ劫掠』の折にも教皇クレメンス七世は秘密の小道からこの城に逃れ難を避けている。またの名を『難攻不落城』という。

城へ続く橋はポンテ・サンタンジェロと呼ばれバロック期のベルリ―二の天使像が置かれている。またクレメンス七世はローマ市中が見渡せる城の天辺に自らの部屋を構え後にパウロス三世がこの部屋を『パウロスの間』と名付け豪華なフレスコ画で飾り優美な生活

を楽しんだ。

今この城はスカルピア率いる秘密警察の本部となっていた。城内の至る所に黒服の柄の悪い警官達が詰め牢獄には政治犯達が収容されていた。拷問とそれによる呻き声が絶える事は無く絞首台には常に人が架けられ銃声が木霊していた。

その中の一室にスカルピアは執務室を置いていた。机の他に長椅子もある。豪華なシャングリラがあり入って右手は壁で仕切られたバルコニーとなっておりガラスの扉が付いている。また左手の壁には王妃の肖像画が飾られている。

その寝室の中のテーブルでスカルピアは一人遅い夜食を採っている。羊肉の煮込みに野菜のスープとボイルドベジタブル、パンに赤ワインといったメニューである。

フォークとナイフを使い食べる。全て食べ終えワインをもう一本頼もうと思った。

警官二人と給仕頭、そして従僕が控えている。どの者も幼い頃から自分に仕えている者達である。

給仕頭と従僕に酒を頼んだ。同時に警官の一人に聞いた。

第四幕その二

「コルシカのあの小男はフォークもナイフも使わないそうだな」

「はい。手掴みで腹を空かせた獣の様に何でも食べるそうです」

警官は答えた。

「ふん、あの男らしい。所詮は卑しいフランスかぶれ」

口の端を歪めて笑った。

「だがその小男が勝ってしまった。王妃はお付の者達と共にナポリへ帰られた。街の様子はどうなっている？」

「大変静かです。哨兵を倍にし警官も兵も全員部署に付けました」

もう一人の警官が答えた。

「要らぬ用心だと思うがな。だが念には念を入れる。フランスの勝利がローマの者を熱したわけではないにしろ、な。遅かれ早かれフランス軍がジャコビーニに導かれこの街に来る。既に奴等は活気付いている。アンジェロットイを捕らえるか殺すか次第我々もローマを去るぞ」

「解かりました」

そう言つて二人の警官は敬礼した。

「まあこの後詰の報酬は陛下からたつぷりと頂けるだろう。ところで子爵殿は今どうされている？」

「礼拝堂で教悔の僧達と御一緒です。最後に神のお情にすぎるよう申しまして自分神を信じない、神の許しなぞもらう必要も無い、唯己が信念と理想、そして芸術の為に生きそして死ぬだけだ、と言つておられます」

「そうか、ジャコビーニらしい言いようだな。今から死ぬというのに大した度胸だ」

スカルピアはいささか皮肉を込めて言った。

ドアをノックする音がした。入れと言うとスポレッタが入って来た。

「どうだ、絞首台の用意は出来たか？」

「はい、このバルコニーの下の橋の袂に。ですが伯爵の方は宜しいのですか？」

スポレッタが危惧した顔で言った。カヴァラドウツシの兄であるアルトゥーロ「カヴァラドウツシの事だ。

「構わぬ、後でどうとも言い繕える。それに弟が政治犯なら幾ら何でも表立って言えまい」

給仕頭と従僕が持つて来た二本目のワインを飲みながら言った。

「ところであの女はどうした？」

「御命令の通り別室に入れております。ですがここが何処なのかはよく知らないようです」

「そうか、それはそれで好都合だな」

一杯飲み干して言った。

「ここへ連れて来い」

「解かりました」

程なくして一人の警官に連れられトスカが部屋に入って来た。それを確かめてスカルピアは立ち上がった。

「ようこそ。サン「タンジエロ城へ」

それまで顔を強張らせていたトスカだがその城の名を聞き血の気を失った。この城へ入る事が何を意味するのか彼女も知っていたからだ。

「その様に気を驚かせないで。まあゆつくりとお話しましょう」

そう言つとスカルピアは指を鳴らした。するとスポレッタ等部屋にいた者は皆退室した。

自分の手で銀の杯に酒を入れる。紅い酒がゴポゴポと音を立てて注がれていく。

「どうです、スペイン産です」

「折角ですが」

「おやおや」

トスカは丁寧に断った。それに対しスカルピアは表情を変えず両

肩を少しだけ上げておどけた様な仕草をして見せた。

「言っておきますが私は酒には何も入れませんよ。我々シチリアの男はその様な手は使わない。縛り首か、鉛の弾か。我々は全てをそれで解決する。とりわけジャコビーニに対しては。まあ窓を御覧なさい」

「何が!？」

トス力は訝しげに問うた。

「何、大した物ではありません。絞首台を二つ用意したのです。一つはこれから来る男の為に。そしてもう一つは今この城にいる男の為に」

「まさか………!」

「そう、貴女の愛する子爵の為のものだ」

「そんな………」

「子爵殿は脱獄囚を匿って更にその囚人を逃がしてしまった。その罪は極刑に値する。因って明朝このサンタンジェロ城にて絞首刑に処する事となった」

「………おいくら………?」

いささか上目遣いでスカルピアに問うた。彼が袖の下に弱いという噂をトス力も聞いていたからだ。

「ほう」

その言葉にスカルピアは嘲笑を込めて返した。

「成程、確かに世の者は私を袖の下に弱い男という。だが美女には金で首を縦には振らない。法も忠誠も見えて見ぬとすれば他の報酬を求める」

「それは………?」

スカルピアの黒い瞳が闇の夜の野獣のその様に光った。

「貴女自身だ」

この時トス力は初めて全てを理解した。自分が何故この城のこの部屋に呼ばれたのかを。

「私の務めは果たされようとしている。軍人が刀や銃を収めると同

時に闘いを忘れる様に今の私は一人の男だ。今夜は貴女の女としての本当の姿を見る事が出来たしな」

とファルネーゼ宮、そしてカヴァラドゥッシの別邸での事について言った。

「ファルネーゼでの歌う姿、そして別邸で苦しみ悶える姿、それ等が全て私の心に抑えられない炎を呼び起こさせた。私が今までこの手にした多くの女達とは違う。どの様な手を使っても私のものにしてみせる」

そう言うトスカの方へゆっくりと歩み寄って来た。それを見てトスカは身を翻して言った。

「私の心も身体もあの人だけのもの、他の人のもになる位なら私はこの窓から身を投げます！」

「どうぞ御自由に」

スカルピアは素っ気無く言った。

「子爵も後から追うことになるな。もし貴女が私の言う通りにすれば良し、さもなければ絞首台だ」

「怖ろしい……身の毛もよだつその言葉……」

その時左手の壁に王妃の肖像画を認めた。慌てて扉の方へ走ろうとする。

スカルピアは黙って立ち止まりそれを見ていた。トスカが扉に手を掛けようとしたその時に言葉を発した。

「どうぞ御自由に。私は手荒な真似はしない。だが王妃は既にナポリへ発たれた。もし貴女が王妃とお会い出来ても王妃は絞首台上の死体に恩赦を施されることになるだろう」

冷然とした態度で言った。更に続ける。

「そうやって必死に恋人の為に尽くす貴女だから欲しいのだ。貴女は他の女とは違う。追い詰め無理矢理奪ってこそ貴女は私のものになるのだ」

そう言うってまた足を進めた。トスカは扉に背を付けた。

第四幕その三

「獣、寄らないで。貴方のものになるなんて・・・・・・・・・・。何と浅ましく破廉恥な人」

「それで？だからといって貴女が欲しくなくなるわけではない。さあ窓を見なさい」

右を見る。今まで真つ暗闇だった空が僅かに明るくなり始めている。朝が近付いてきているのだ。

「もう時間だな」

「待つて下さい！」

トス力は叫んだ。

「では私のものに？」

右の人差し指を振り言った。

「・・・・いいえ」

「では駄目だ」

「そんな・・・・・・・・許して・・・・・・・・許して下さい」

フラフラと前に進み長椅子の背に倒れ込んだ。

「私は歌に生き愛に生き常に人の為に尽くしてきました。困っている人や子供には手を差し伸べ誠の信仰の祈りと花を捧げました。聖母様のマントに宝石を捧げ天の色彩り々々の星々に歌を捧げました。それなのに・・・・・・・・それなのにどうしてこの様な報いを私にお与えになるのですか」

トス力は泣き崩れた。だがスカルピアは冷酷にトス力を見つめたままである。

「さあ決心を」

「私に？」

トス力は泣き崩れた顔を上げた。

「これ以上何がお望み？私はもう心が壊れてしまったわ。その壊れた心さえ貴方は手に入れたというの？」

「そうだ、私は貴女の心を欲しいのだ」

その時ドアをノックする音がした。スカルピアが入れと言うとスポレッタが入って来た。

「何かあったのか？」

「はい、先程スキャルオーネ、コロメツティの追跡隊から連絡が一人来ました。アンジェロツティ侯爵を発見したそうです」

スポレッタは姿勢を正し敬礼をして報告した。

「そうか、これで私の首も完全に繋がったな。そしてもう一人は？」

「カヴァラドゥッシ子爵ですか？もう何時でも執行出来ます」

その言葉を聞いてトスカの顔は再び血の気を失くしてしまった。

「そんな、もう……」

それを見逃すスカルピアではなかった。

「待て」

スポレッタを制しトスカに近付いた。そして小声で問うた。

「いいな」

それに対しトスカは無言で頷いた。

スカルピアの表情が勝ち誇ったものとなる。椅子の背に顔を埋め泣き崩れるトスカをよそにスポレッタに近付く。

「待つて、あの人を、マリオをすぐに自由にして」

トスカが顔を上げて言った。スカルピアはそれを左手で制した。

「見せ掛けが必要だ。公然と解き放つ様な事は私にも出来ない。子爵は一度死ななくてはならないのだ」

そしてスポレッタを指差して言った。

「それはこの男が確実にやってくれる」

スポレッタは指差されていささか驚いた。だが顔には出さなかった。

「誰がそれを保証してくれますか？」

トスカは問うた。スカルピアはその疑念を打ち消した。

「貴女の目の前で私が彼に直接与える命令だ。それでも？」

「いえ」

「なら良し。スポレッタ、扉を閉めろ」

「はい」

その命令通りスポレッタは急いでドアを閉めに行った。そして小走り気味にスカルピアの下へ戻った。

「考え直した。子爵は銃殺とする」

そう言つて一呼吸置いた。

「パルミエーリ伯爵の時の様にな」

真顔で何か意味ありげにスポレッタを見て言った。

「殺す……」

スポレッタも真顔で言つた。だがそれをすぐに打ち消す様なスカルピアの言葉が発せられた。

「いや、見せ掛けだ。パルミエーリ伯爵の時と全く同じ様にだ。寸分違わぬようにな。……解つたな」

「解りました。パルミエーリ伯の時と同じ様に」

明らかに意味ありげな主の言葉にスポレッタは妙に丁寧に答えていた。そして一瞬トスカに目をやった。何か悲しみを帯びた目だったが二人の言葉にのみ気を張っていたトスカは気付かない。だがパルミエーリ伯と同じ様に、という言葉が強く残った。

「よし行け、あとこの御婦人は囚人ではないから城内を自由に歩かれても城内に出られても構わない。階段の下に部下を一人置き後でこの方を子爵のおられる礼拝堂まで御案内するように。四時にこの方が最初におられた部屋に来てな。いいか、四時だぞ」

「解りました」

そう言つて一礼してスポレッタは退室した。部屋を出る時チラリとトスカの方を見たが当のトスカもスカルピアもそれには気付かなかった。門の落ちる音が二人のいる室内に響き渡った。

「私は約束を守った」

トスカの方を振り向き言つた。そしてトスカの方へ歩み寄つて行く。

「いえ、まだです。あの人と一緒にローマを発てる様に旅券を頂き

たいのです」

トス力は涙で崩れた顔で言った。

「宜しい、では望みを適えさせてあげよう」

心の中で何か思いつつも机のところまで行き立ったまま書き始めるが暫くして手を止めた。

「どの道を？」

「一番近道を」

トス力はにべもなく答えた。

「チヴィタヴェツキア？」

「はい」

「解った」

スカルピアはまた書き始めた。彼が旅券を書いている間トス力は食卓へ向かい気を落ち着かせる為先程スカルピアが注いで勧めたスパイン産の赤ワインを取った。だが手が戦慄いている。しかも雪の様に白くなっている。冷たい。その手で杯を口まで持っていこうとする彼女の目に食卓の上のナイフが入った。見れば先が鋭く尖っている。

第四幕その四

スカルピアの方を見る。旅券を書く事に心を集中させている。

トス力は意を決した。非常に用心深く気取られない様にナイフを手元に引き寄せた。

取った。そして食卓に寄り掛かりじつとスカルピアを注視しながらナイフを自分の後ろに隠した。

旅券が書き終えられた。スカルピアはその旅券に印を押し、丁寧に折り畳んだ。そして食卓の方にいるトス力に一步步近づいて行く。

「さて、と。これで私のものだな。では熱い接吻でも……」
ゆつくりと手を広げ抱き締めようとする。だがそれより早くトス力が彼の懷へ飛び込んだ。

「これがトス力のキスよ！」
スカルピアの顔が凍り付いた。トス力のナイフが彼の胸を深々と突き刺したのだ。

「ぐおおおお……」
それまでの勝ち誇った顔は何処にも無かった。化け物の様な怖い顔でトス力を見下ろした。

トス力は身を引いた。胸にナイフが突き刺さったまま残った。傷口から鮮血が溢れ出してくる。

「く……く……く……」

口からも血を噴き出しながらトス力の方へ行こうとする。それまで肩でハアハアと息をしながらスカルピアの様子を見守っていたトス力だが彼が近寄ってきたのを認め扉の側まで退いた。

「ぐふっ……」

最後に大きく喀血した。そして前に倒れ込み仰向けになりそのまま動かなくなつた。

「死んだ……の？」

スカルピアの眼から光が急激に消え去っていく。顔も手も生者の色を失っていき傷口や口から血が溢れ出続けている。

「……………死んだのね」

見れば手の平に血が付いている。スカルピアの亡骸から目を離さずに食卓のところへ行き、そこにあったナプキンを指洗いに入れてある水に浸して手と指をよく拭いて左手の壁に掛けてある鏡を見て髪のを直した。

鏡越しにスカルピアを見ている。彼が手に握っている旅券に気が付いた。

（そう、旅券）

髪を直し終わるとスカルピアの下へ歩み寄った。そして彼の手にある旅券を手に取り持ち上げようとする。

その時太鼓の音が聞こえた。それは今日死刑が行われる事を知らせる太鼓であった。

トス力は思わず飛び上がった。旅券から手を離してしまった。再度旅券を手に取り持ち上げた。するとスカルピアの手も一緒に持ち上げられた。

それを見て青くなった。だが必死に気を保ち屍の手から旅券を奪った。

腕はそのまま虚空を掴んだまま崩れ落ち音を立てて床に落ちた。数回撥ねそのまま動かなくなった。

トス力はその旅券をドレスの胸元にしまい込んだ。そして目を大きく見開いたまま苦悶の表情で事切れているスカルピアを見下ろした。

「この男の為にローマ中が震え上がっていたのね」

一言そう呟き立ち去ろうとする。扉の左右に一つずつ燭台があった。

それに灯されている火を消そうと思った。だがふと吹きかけた息を止めた。ある事が彼女の頭の中に閃いた。

左右のそのそれぞれの蝋燭を手を取った。そしてスカルピアの遺

体の側まで行き一本を彼の頭の右に、もう一本を彼の頭の左に置いた。

そして次に部屋を見回した。するとスカルピアの机の上に一本の十字架があった。

それを手に取り恭しく運び、スカルピアの遺体の側まで来ると跪いてスカルピアの胸の上にその十字架を置いた。そして祈り胸の前で十字を切りつつ立ち上がった。

二本の蠟燭以外の全ての蠟燭を消した。そして用心しつつ扉を静かに、少しだけ開けた。

様子を窺いつつ身を差し入れた。そして静かに外へ出て扉を閉めた。

扉が閉められた時風が微かに入った。風はスカルピアの遺体のところまで舞い込んで来た。

風で蠟燭の火がゆらゆらと揺れる。両方共もう少しで火が消えそうになる。

だが風が止んだ。かろうじて消えなかった。そして消えずにすんだ火はそのまま静かに燃え続けスカルピアの遺体と部屋を照らし続けていた。

第五幕その一

第五幕 サン＝タンジエ口城屋上

夜の闇がその暗き天幕を空から外しはじめ朝の光が世を眩しく照さんとする時であつた。死刑囚が最後の一夜を過ごす礼拝堂に一人の男がランタンを持って入って来た。

制服を着ているがスカルピアの手の者達の黒いそれではない。白系統の制服である。元々サン＝タンジエ口城に勤めている看守達の制服である。

看守は眠そうに目を擦っている。そして廊下の灯を一つずつ息を吹いて消しながら進んでいる。

城の中に鐘の音が入ってくる。朝の祈祷の鐘の音だ。

鐘の音とは別の音も響いてくる。これは鈴の音だ。羊達の喉に着けられている鈴の優しい音色である。

羊達を追う少年達の歌声も聞こえてくる。清らかな子供の声で歌われている。

風が動かす木の葉程多くの溜息を僕は貴女に送ろう

だが貴女はそんな僕を意に介さず僕はそれを悲しむ

ああ、そんな僕を慰める金のランプよ、御前の優しい灯も僕の心を癒せない

その歌声に城を警備する兵達も聞き惚れていた。夜の厳しい勤めを終えようとしている彼等にとってこの鐘と鈴の音、そして少年達の声は他の何にも替え難い心の癒しであつた。

ランタンを左手に持ち替え右手で礼拝堂の扉を開けた。その中の一つにマリオ＝カヴァラドゥッシは座っていた。

見れば自身の青い上着を身体に掛け眠っている。前の机には何か細長く薄いものが二つ置かれている。

「子爵、起きて下さい」

看守は声を掛けた。カヴァラドゥッシはその声に応じゆっくりと
瞼を開けた。

「貴方の番ですよ」

「ん、少し早いんじゃないかい？」

辺りを見回しまだ暗いのを確認して言った。

「一時間あります。司祭様が貴方の最後のお祈りをお待ちです」

「それは要らないって言ったのに。律儀だね、全く」

カヴァラドゥッシはそう言って苦笑した。

「規則です」

「そうか。けどね、悪いけどいらないよ」

「そうですか」

「あ、ちよつと待って」

立ち去ろうとする看守を引き留めた。

「何ですか？」

「一つ聞きたいんだけど。兄は今どうしてる？」

「伯爵ですか？停戦協定を結ばれにあらためてマレンゴへ向かわれ
ました」

「そうか、じゃあ心おきなくこれを渡せるな」

そう言って机の前のもののうち一つを看守に手渡した。

「これは？」

「兄への最後の手紙さ。こんな事もあるつかと前々から考えていた
んだ。今その時になったけれどね。もう一つあるよ」

そしてもう片方の手紙も看守に手渡した。

「こちらはフローリアへ」

「トスカさんですね」

「そう。これも別れの手紙だよ。悪いけれど二人に届けてくれるね」

「はい、子爵の御願いとあらば」

「有り難う、これはお礼だよ」

指から何か外した。大きなルビーの指輪だ。

「えっ、よろしいのですか？」

「もう僕は死を待つ身、それなのに持っていてても無意味だろう？ 気にしないでもいいからチップだと思って受け取ってよ」

「・・・はい」

看守はそれを受け取った。

「じゃあ手紙の事、くれぐれも頼んだよ」

「解かりました」

二通の手紙とルビーの指輪を受け取った後看守は礼拝堂を後にした。カヴァラドゥッシー一人が残った。

「もう一時間か・・・。一眠りするか」

上着を掛けまた眠りはじめた。すぐにまどろみだした。

意識が遠のいていく。その中でカヴァラドゥッシは夢の世界へと入っていった。

夜空に無数の星々が瞬いている。その光は星の数だけ多様である。そして庭には色彩り彩りの花々と若い草木が芳わかしい香りを発している。その中に彼はいた。彼女もいた。共に楽しみ愛の言葉を交わし合う。。。かつての素晴らしき日々の思い出だった。

「まだこの世に未練があるのかな」

カヴァラドゥッシはふと目が覚め苦笑交じりに呟いた。

「絵とアンジェロッティが気懸りだが・・・。絵は何時の日か誰かが僕の志を受け継いで完成させてくれるよう祈るしかない。アンジェロッティは・・・生きていてくれ、友よ」

再び目を閉じた。そして再び眠りへと入っていく。

「子爵、子爵」

誰かがカヴァラドゥッシの右肩に手を掛け静かに揺り動かした。ふと目を覚まし声のした方へ顔を向けた。

「ああ警部、貴方でしたか。眠っていたのですが。私に更に深い眠りを知らせる為に来られたのですか？」

「いえ」

スポレッタは静かに右手と顔を振ってそれを否定した。

第五幕その二

「貴方にお会いしたいという方がおられまして。その方に貴方も是非お会いになりたいと思われます」

「……フローリアかい？」

「はい」

スポレッタはそう言う指で扉の前に控えていた一人の警官に合図をした。警官により開けられた扉の向こうにはトスカがいた。

「マリオ！」

トスカは喜び勇んだ足でカヴァラドゥッシの方へ駆け寄る。そして思い切り抱き締めた。

「フローリア！」

カヴァラドゥッシもトスカを抱き締めた。二人は互いを強く固く抱き締め合った。

「御免なさい、マリオ。私の愚かな嫉妬が貴方を苦しめてしまって」

「いや、謝るのは僕の方だ。いつも君を惑わせてばかりで酷い事も言ってしまった。この君との最後の別れの時になってそれが大いに悔やまれる」

「いえ、これが最後のお別れではないわ」

「えっ!？」

トスカが小声で言ったその言葉にカヴァラドゥッシは驚いた。

「スカルピア長官に私が頼み込んだの。そして貴方の命は助かったのよ」

「本当かい!？」

スポレッタは無言で頷いた。彼が人払いをしたのだろう。見れば礼拝堂の中には二人と彼の他は誰もいない。

「貴方は銃殺にされるの。けれど安心して。銃には火薬だけ詰めて貴方を撃つ真似をするだけ。処刑場で兵隊さん達が銃を撃ったらそれに合わせて倒れて。兵隊さん達が引き揚げたら私達はローマを出

られるのよ、すぐに」

「けれどそんな事が本当に……」

訝しがるカヴァラドゥッシにトスカは胸元に隠してあった旅券を見せた。

「フローリア」トスカと……」

「同行の騎士の自由通行証」

トスカも一緒になって読んだ。

ね、貴方は自由の身なのよ」

「本当なのか、信じられない」

スカルピアのサインに印まである。どう見ても偽者とは思えない。信じてよろしのですね、警部」

カヴァラドゥッシはスポレッタの眼を見て言った。

「はい、信じて下さい。私が保証します」

その眼は何処となく泳ぎそうになっている。

「そうですか」

その眼を見てカヴァラドゥッシも察した。だが言わなかった。

「では私は準備を進めに行って来ます。夜が明けないうちがお二人にとっていいでしょうし」

スポレッタは二人から何気無く視線を逸らしつつ言った。カヴァラドゥッシはそれに気付いていたがトスカはそれには気付いてはいなかった。

「警部さん、本当に有り難うございます。貴方に神の御加護がありますように」

「いえ、そんな……。それでは私はこれで」

スポレッタはそそくさと礼拝堂を後にした。なるべく二人と目を合わせないようにして。

スポレッタがいなくなるとカヴァラドゥッシはトスカに尋ねた。

「これは一体どういう事なんだい？あの男が僕達に恩恵を初めて与えるなんて」

「そして最後の」

トス力は旅券を懐に入れながら言った。この時手に何かが当たった。それが何かすぐに思い出した。

「えっ!？」

「あの男は貴方の命か、私の愛かを要求してきたの。じりじりと私に迫って来たわ。何とか拒もうとしたけれど無駄だったわ。そして遂に私は彼と約束をしたわ。私は覚悟した……。けどその私の目に光る刃が入ったわ。あの男はこの旅券を作り私を抱き締めに来たわ。けれどその時に私はあの男の胸に刃を突き刺したの」

「君がこの手で……。僕の為に……。」

トス力の手を取りそう言った。

「その為にこの手が血に塗れるなんて……。白く美しいこの手が……。」

「貴方の為なら私は血に塗れても構わないわ。だって貴方は私が愛する唯一人の人だもの」

「フローリア……。……。」

トス力を思い切り強く抱き締めた。

「チヴィタヴェツキアから海に出ましよう、舟で」

「うん」

「その前に大事な仕事があるわ」

「処刑場だね」

「そう、その時これを持って行つて」

そう言つて懷から何か取り出した。

「それは……。……。」

それは十字架だった。普段トス力が首から提げているものとは違い妙に大きい不思議な感じのする十字架だった。

「ファルネーゼ宮である方から頂いたの。緑の瞳をした紅い服の方ね。何かある時必ず護ってくれるだろうって。これから貴方は銃の前に立たなければいけないでしょ。御守りに持つて行つて」

「けど僕は……。……。」

断ろうとするがその十字架とトス力の真摯な顔を見て彼は考えを

変えた。

「有り難う、頂くよ」

「うれしい」

そしてその十字架を上着の胸の部分にあるポケットに入れた。奇しくもスカルピアが刺されたのと同じ場所だった。

カヴァラドゥッシが胸に十字架をしまい終えてすぐだった。看守とスポレッタと一緒に礼拝堂へ入って来た。何故一緒だったかという深い意味は無い。二人共カヴァラドゥッシを呼びに行こうとしてたまたま一緒になっただけである。

「解かってる、用意は出来ているよ」

「はい」

行こうとするカヴァラドゥッシにトス力がそつと近付いた。そして小声で囁く。

（上手くやってね。最初の銃声で倒れるのよ）

（うん）

カヴァラドゥッシも答えた。

（そして私が呼ぶまでは立たないで）

（解かったよ。舞台でのフローリアみたいにすればいいんだね）

（そうよ）

二人に連れられカヴァラドゥッシは礼拝堂を後にした。トス力はスポレッタに自分も付いて行きたいと頼み込んだ。スポレッタはしばし考え込む顔をしたが結局それを認めた。

「けれど、本当に宜しいのですね？」

暗く悲しげな顔でトス力に念を押した。

「？」

トス力はスポレッタが何故そんな顔をするのか解からなかった。パルミエーリ伯爵という人物がどの様な人物か知っていたら理解したであろうか。

「はい」

トス力は笑顔で答えた。

第五幕その三

「解かりました。ではどうぞ」

スポレッタは溜息をつきその願いを認めた。カヴァラドウツシの後をスポレッタに導かれ処刑場へ向かつて行く。

処刑場は城の屋上であつた。この城では死刑囚の処刑も多かつたが屋上でもそれが行われていたのである。

屋上には一つの穴がある。それはティベレ川へ向けられている。それは何故か。

斬首する。その首を穴へ落とす。すると首は穴を転がってゆきティベレ川へ落ちていくのである。

ユーモラスであるが残酷な話である。これも現世で人が為す事の一部なのだ。

空は次第に明るくなるうとしている。東から暁を告げる仄かな光が差し込み始めている。だが空には星がまだ煌いている。雲一つ無い晴れ渡つた空である。ローマ市中が一望出来るその中にはサン・ピエトロ寺院もファルネーゼ宮もある。サン・アントレア・ヴァツレ教会もだ。

その屋上の最も高い場所にまるでローマ全土を守護する様に立つ像がある。この城の名の由来ともなっている大天使ミカエルの像である。

今將に聖剣を鞘に納めんとするその像は十八世紀にピエター・フェルシャツフェルトによつて作られた。黒死病をもたらした悪霊を降した姿をそのまま青銅の像としたのである。

この天使は悪を討ち滅ぼす天使であると同時に人の罪を裁く天使でもある。最後の審判の日に魂を計る天秤を持つて人々の前に現われ、その善悪を計るのである。そしてそれを下にして人々は最後に神の下により裁かれるのである。

その天使が見守るこの城において今一人の男が処刑の場に現われ

た。ミカエルの眼にその男が映った。

カヴァラドゥッシはトスカに別れの挨拶を済ませ処刑場にいる士官の一人の後につき処刑の場に立った。それを見届け看守はこの場を去った。トスカはスポレッタに勧められ警備室に向かうがそこには入ろうとせずカヴァラドゥッシをしかと見詰めている。

トスカから見て正面の壁のところにカヴァラドゥッシは立っていた。銃を持ち立ち並ぶ兵士達の横から彼の姿がはっきりと見えている。

下士官がカヴァラドゥッシに歩み寄り目隠しをしようとするが彼は微笑んでそれを拒んだ。下士官は去った。そして兵士達の方へ行き何やら命令を与えている。

その一連の動作を見ながらトスカは考えていた。これからの事である。

（馬を替えながら行けば四時間でチヴェタヴェッキアまで行けるわね。そこからヴェネツィア行きの船に乗ればもう安心。私達の邪魔をするのは誰もいないわ）

カヴァラドゥッシを見る。毅然として立っている。

（マリオ、何て凛々しいの……。本当に格好良いわ）

ちらりと階段を見た。一抹の不安が脳裏をよぎった。

（誰かがあの男を起こしに行かなければ良いのだけど。もし私が殺したとわかれば……）

兵士達が銃に弾を込め終えた。下士官が退き士官が軍刀を抜いた。
（いよいよね……。マリオ、上手くやってね）

士官が軍刀を振り上げた。兵士達が一斉に銃を構える。トスカは銃声が聞こえないように手で耳を隠した。そしてカヴァラドゥッシに対し上手く倒れるよう頭で合図した。

カヴァラドゥッシは頷いた。そして声には出さず口だけで彼女に言った。

サ・ヨ・ウ・ナ・ラ
と。

（まあ、本当に役者ね）

それを見てトス力は笑った。同時に軍刀が振り下ろされた。

銃声が刑場に轟いた。カヴァラドゥッシは後ろへのけぞった。そして前に倒れ横に転がりうつ伏せになり止まった。

下士官が彼に近寄り注意深く見る。スポレッタも来た。

下士官が腰から拳銃を取り出した。倒れ込むカヴァラドゥッシの頭にそれを近付け最後の一撃を与えようとする。だがそれをスポレッタが止めた。

スポレッタは下士官を遠ざけた。そして自分の着ていた外套を脱ぎそれをカヴァラドゥッシにかけた。そして十字を切り彼から離れた。

士官が兵士達を整列させる。下士官は置くにいる番兵を呼び戻す。士官とスポレッタは互いに敬礼し合い士官は兵士達を連れ階段を降りて行く。スポレッタも下士官と番兵を連れ場を後にする。トス力と擦れ違う。彼女に一礼するがどういいうわけか目を合わせようとはしなかった。

スポレッタ達も去った。銃の硝煙も消え静まり返った処刑場にトス力とカヴァラドゥッシだけがいた。

「マリオ！」

トス力は二人の他に誰もいなくなるのをもどかしく待っていたのだ。どれだけ長かっただろう。だがもう誰もいない。場には二人しかいない。カヴァラドゥッシの下へ駆け寄った。

「さあ行きましょう、早く！」

外套を取りカヴァラドゥッシを揺り動かす。だがカヴァラドゥッシから返事は無い。

「どうしたの！？ねえマリオ、マリオ！」

次第に怖くなってくる。揺り動かしが強く激しいものになっていく。

手がカヴァラドゥッシの腕に触れた。その時腕に着いたものを見てトス力の顔から血の気が引いた。

「血・・・・・・・・そんな・・・・・・・・マリオ！」

その時だった。カヴァラドウツシの身体がピクリ、と動いた。

「・・・・・・・・フローリア・・・・・・・・かい？」

顔をトスカの方へ向けてきた。その顔には生気があり死者のものではなかった。

「マリオ・・・・・・・・良かった・・・・・・・・」

起き上がるカヴァラドウツシに抱き付いた。黒い瞳から歓喜と安堵の涙が溢れ出てくる。

「フローリア・・・・・・・・」

カヴァラドウツシもトスカを抱き締める。二人は強く抱擁し合った。

「もし・・・・・・・・もしもの事があつたらって・・・・・・・・私、怖かった・・・・・・・・」

トスカは泣きながら言った。涙がカヴァラドウツシの青い上着を濡らし藍色にしていく。

「フローリア、スカルピアは僕を殺すつもりだったんだ」

「え・・・・・・・・」

トスカは顔を上げた。その黒い翡翠の様な瞳を見つつカヴァラドウツシは続けた。

「あの警部を見て解かったんだ。妙に態度が後ろめたかっただろう」

「そういえば・・・・・・・・」

スカルピアとのやりとり、礼拝堂やこの処刑場での行動、どれを取っても面妖な点ばかりであった。

「だから僕はあの十字架を受け取り君に別れを告げたんだ。もうこれで最後だと思ったからね」

「それで・・・・・・・・」

今まで教会で祈り一つしなかったカヴァラドウツシが何故十字架を受け取ったかトスカはようやく解かった。恋人からの最後の贈り物を受け取ったのだ。

「けれど君の贈り物が僕を救ってくれたんだ。見てくれ」

そう言つと懷からその贈り物を取り出した。

十字架は所々が碎けていた。それが弾丸によるものである事は明らかだった。

「ああ………」

トス力はそれを手に取った。そして両手で強く握り締めた。

「腕に一発当たつて貫通したけれどね。他は全てこの十字架が守ってくれた。君のおかげだよ」

「いえ、神のお力よ」

トス力は感極まつた顔で言った。熱い涙が頬から銀の十字架へ落ちていく。

第五幕その四

「そうかも知れないね」

そう言うのと優しく微笑みトスカを再び抱擁した。そして二人は立ち上がった。スカルピアの邪な目論見は完全に費え去ったのだ。

否、まだスカルピアの魂はこの城にいた。生き長らえた二人に再び襲い掛かってきた。

「逃がすな、まだ上にいるぞ！」

スポレッタの声だった。その他にも怒声が続く。スポレッタが階段から姿を現わした。警官達や兵士達も後から続く。

「ご婦人、やってくれましたね。まさかこの様な事を為さるとは」

左手に持っている物をトスカに見せた。先端が血塗られている。あのナイフである。

「しかも子爵までおられる。一体どういう事かわからないが」

そう言いつつも内心では胸を撫で下ろしていた。彼にとってもやはり後ろめたい仕事であったのだ。

「ですがあの方を殺した罪は償って頂きます。我等の主の命は高くつきますよ」

スポレッタもまたシチリアの男だ。血の絆とその報復は骨の髄まで染み込んでいる。

「待て、フローリアに近寄るな！」

カヴァラドゥッシがトスカの前に出た。そしてジリジリと歩み寄って来る兵士や警官達から彼女を護ろうとする。

兵士の一人がその足下へ銃を撃った。スポレッタも懷から拳銃を取り出した。

「御心配無く。子爵にもトスカさんにも指一本触れませんよ。今この場で主の下へ行って頂きます」

兵士も警官達も二人へ向けて銃を構えた。それぞれの引き金に指が掛けられる。

「シチリアの掟、その身を以って教えて差し上げます」

「くっ……」

カヴァラドゥッシは齒を噛み締めた。元よりトスカに救ってもらった命、惜しくはない。覚悟は出来ている。だがトスカを死なせたくはなかった。

トスカを護る様に彼女の前に立った。己を盾にしても護るつもりだった。だがトスカは動いた。

ミカエルの像がある高台の方へ走った。そしてその側に着くとスポレッタ達の方へ振り向いて言った。

「貴方達に殺されるぐらいなら……。またマリオを殺させるぐらいなら……。私はティベレ川へ飛び降りて貴方方の罪を全て主の御前で申し上げるわ！」

「……」

彼女の行動と言葉にスポレッタも兵士達も驚愕した。そしてその時だった。

突如としてローマ中で大歓声が沸き起こった。それは口々にフランスを、ナポレオンを讃える声だった。

「スポレッタ、まずいぞ！」

コロメッティとスキャルオーネが飛び込んで来た。二人共息を切らしほうほうのていで入って来る。

「アンジェロッティ候を共和主義者達に奪われた、そして彼と共にフランス軍がローマの前に姿を現わしたんだ！」

「何……」

信じられなかった。彼等は全てマレンゴにいる筈ではなかったのか。

「だが……」

トスカとカヴァラドゥッシの方を見る。二人共何が起こったのかまだ把握しきれておらず呆気にとられている。

「一刻も早くローマを脱出するんだ、さもないと我々は狂った市民達のリンチで皆殺しにされるぞ！」

そうだった。権力を失くした彼等を待つ運命が何なのか、それを本能的に知っていたのだ。

「………解かった、行こう」

スキャルオーネとコロメツティに急かされスポレッタ達は屋上から逃げる様に消え去った。最後尾にいたスポレッタが階段に足を入れた時サツと二人の方を振り向いた。

「………お元気で」

スポレッタはそう言うのと去って行った。後には恋人達が残された。暫くの間城内の殆どの者が逃げ去ったサン＝タンジエロ城は静まり返っていた。だが朝日が姿を現わす時になると城内に喚声が木霊しはじめた。

「カヴァラドウツシ、無事で良かった」

朝日に輝きはじめたポンテ＝サンタンジエロの上でカヴァラドウツシとアンジエロツティは手を握り締め合った。カヴァラドウツシの傍らにはトスカがおり三人の周りを共和主義者や青い軍服の将兵達が囲んでいる。

「アンジエロツティ、君こそ。よく生きていてくれた」

二人は再び両手を握り締め合った。強く固く握り合った。

「警官達に追い詰められた時は流石に僕も駄目だと思った。だが奇跡が起こったんだ」

「奇跡？」

「うん。今將に捕らえられようとしたその時彼等が現われたんだ。そして僕を救い出してくれた」

そう言うってフランス軍の将兵達を指し示した。

「彼等を導いてくれていたのはこの方だ。この方こそ僕の命の恩人なんだ」

アンジエロツティに手で指し示された男が前に出て来た。その男の姿を見た時トスカは思わず叫んでしまった。

「貴方は………！」

男は悪戯っぽく左目をウィンクした。紅衣のあの男であった。

「どうしたの、フローリア。お知り合いの方なの？」

「いえ……」

男が手で紹介されるのを制止したのでトスカは言うのを止めた。
何か知ってもらいたくない事情が男にも有るのだろう。

「何でもフランスともこのローマとも所縁の有る方らしいんだ。それで僕を助ける事が出来たらしい」

「成程」

「僕はまたこのローマで領事を務めさせてもらう。今度こそローマを自由と平等が息吹く街にするつもりだ」

「うん、頑張ってくれ。君なら出来る」

カヴァラドゥッシは友に言った。

「そして君はどうするんだい？ローマに残るのかい？それならば一緒に働かないかい」

「そうだね」

トスカの方を見た。自分に対し微笑んでくれている。

「僕はあの絵を完成させてフローリアと一緒にヴェネツィアへ行くよ。予定していた事だしね。それに僕は彼女と何時までも一緒にいたいんだ」

「マリオ……！！」

トスカがカヴァラドゥッシの胸に抱きついた。衆人の前でありカヴァラドゥッシも顔を赤らめた。

「そうか。じゃあ残念だけでもうすぐお別れという事になるね」

「ああ」

「機会があつたらまた会おう。そして何時までも変わらぬ友情を」
「こちらこそ」

ローマと自由を讃える声の中カヴァラドゥッシとトスカは歩きはじめた。既に陽は高く登りローマの街をその黄金色の光で照らしていた。

第五幕その五

その後欧州は十五年もの間ナポレオンという風雲児によって席卷される。そこにいる全ての者が彼の強い影響下に置かれる事となった。

エマ・ハミルトンはネルソンとの愛に生きるが彼の死後放蕩の末カレーで失意のうちに死す。

マリア・カロリーネと彼女の王国は後にイタリア統一という大きな激流に呑み込まれその中に消えた。

アッタヴァンティ侯爵夫妻はローマにおいて貴族として平凡な一生を終えた。

スポレッタ達はシチリアへ逃げ帰った。その行方はようとして知れない。おそらくは元の山賊にでも戻ったか平凡な農民になったのであろう。

アルトゥーロ・カヴァラドゥツシはオーストリア軍の将として各地を転戦、知将として歴史に名を残す事となる。

アンジェロティは再度ローマ共和国領事に就任。紅衣の男の補佐を受け自由主義の普及に尽力する。彼の死後紅衣の男は姿を消した。一説によると姿を消す直前ナポレオンの前に現われたらしい。それ以後ナポレオンの没落が始まった。

マリオ・カヴァラドゥツシはトスカと共にヴェネツィアへ行き絵を描き続ける。後に欧州の政変に伴い彼女と共にアメリカへ渡りその地で一生を終える。彼の絵は今でも名画として世界中の美術館に飾られ美と芸術を愛する人々に愛されている。

フローリア・トスカはヴェネツィアへ行った後も高名な歌手として恋人共に欧州を回る。ナポレオンが倒れると恋人と共にアメリカへ移り以後ニューヨークを中心に活躍した。稀代の名ソプラノの歌と愛の生涯は彼女が泉下の人となって尚人々の心に生き続けている。そして今でも我々の心を惹き付けてやまない。

ラストスカ

完

2004・6・17

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2856f/>

ラ = トスカ

2011年4月28日00時36分発行